

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.sgepss.org/sgepss/>

第202号 会 報 2010年1月14日

目	次
SGEPSS 60周年記念誌に寄せて — 垣間見た立ち上げの頃、STEP計画、 惑星圏研究への道 大家 寛 1	シミュレーション分科会活動報告 中村琢磨 22
第126回SGEPSS講演会概要報告 9	内部磁気圏分科会活動報告 小野高幸、 小原 隆博、塩川 和夫、関 華奈子、 長妻 努、三好 由純 23
第126回総会報告 10	2009年秋アウトリーチイベント 「宇宙を探る電波のチカラ ～ビビッとスゴイ電波の不思議～」報告 畠山 唯達 24
第126回総会会長挨拶 津田 敏隆 10	男女共同参画提言WG報告 木戸 ゆかり、 坂野井 和代、長妻 努 25
第126回評議員会報告 12	名古屋大学太陽地球環境研究所教員公募 26
第25期第4回運営委員会報告 13	山田科学振興財団 2010年度研究援助の推薦について 26
学会賞決定のお知らせ 津田 敏隆 15	「スプリング・サイエンスキャンプ2010」 のご案内 27
第126回講演会学生発表賞 (オーロラメダル) 報告 15	公益信託公募 27
長谷川・永田賞を授賞して 上出 洋介 16	会計報告 (別表) 29
特別表彰を受賞して 夏原信義 (夏原技研) 17	学会賞・国際交流事業関係年間スケジュール 35
悼辞—故若井登会員— 恩藤 忠典 18	SGEPSSカレンダー 35
会計報告 19	賛助会員リスト 36
中間圏・熱圏・電離圏研究会 (略称: MTI研究会) 活動報告 藤原 均 他 19	
データ問題検討分科会活動報告 石井 守 21	
古地磁気・岩石磁気研究会活動報告 齋藤 武士 22	

SGEPSS 60周年記念誌に 寄せて

— 垣間見た立ち上げの頃、

STEP計画、惑星圏研究への道

大家 寛

序

SGEPSSが日本地球電磁気学会の時代も含め、創立60周年を迎える喜びのとき、私もこの学会で青春を生きた者の一人として、何か残させていたできた筆をとった。たしかに、SGEPSSに育てられSGEPSSとともに歩んで来た想いを持つ者の一人として、60周年はあまりにも感慨深く、記念誌に載せていただく事項も、思えば数限りない。しかし

極力その思いを抑え他の会員の方にご迷惑をかけるようなバランスの感覚は失わないと自戒して、始めるが、書くほどに熱のほとぼしりは消せない感がある。その点で、書きすぎたりした事項がもしあったとしたら、お許し願うほかない。

1. 立ち上げの頃

真の学会黎明期は、といえ、きっと、故、福島 直教授 (東大名誉教授) あたりが、一番詳しく観察されていたであろう、あるいは加藤 進教授 (京都大学名誉教授) がどこかに書いておられるかも知れない。しかしそうした世代の先生方が少なくなった、現在となると、私の世代は自らの見聞をもって、初期に近い学会の状況として語っておくことが、許されよう。というのも学会開設の当事者であった世代の先生と、ともに過ごしたということもあって、先輩たちのお話を単に昔話

と受け取るのではなかった。そこで自らの経験を中心にするのであるが、SGEPSSの“立ち上げの頃”と題して、始めたい。

1.1 少なかったパラレル・セッション

日本地球電気磁気学会に私が、はじめて出席したのは、第29回、1961年5月、春の総会・講演会の折で、東大の当番のもと本郷キャンパスの会場での開催であった。会期は3日間であったと思うが、セッションは単一かと感ずるほどシンプルであった、(空中電気などはパラレルセッションにはなっていたと、後で聞いた)。いずれにしても、超高層物理学の分野と固体地球電磁気の分野が一体となって、進行されていた。若い学生レベルの人がどの程度、他分野の内容を理解し合っていたか定かではないが、工学部修士課程で自動制御を修め、いきなり電離層電波伝搬を始めたばかりの私には、ただ、驚きで、新鮮な香りに満ちていた。

書き物に頼らない範囲で私の脳裏をよぎったものを、思いつくままの風景として書かしていただくと、東大グループは、研究所では地中に導電領域があるとき、地表ではどのような磁場異常が観測されるか、教室では岩石磁気測定から、古地磁気分布はどうであったか、そして南極の問題、とくにオーロラ研究で輝いていた。名大グループは関戸教授のリーダーシップのもと、宇宙線の到来方向の偏りの観測、たしかオリオン座の方向から来る成分がパーセント・オーダーで多いという、太陽圏磁場によるモジュレーションに情熱をそそいでいた。京大グループは電離層ダイナモやアルフベン波の理論に燃えていた理学部、そしてHFとVLFの電離層電波伝搬、中間圏の温度と風のロケット実験を大阪市大とともに進めていた工学部、の姿があった。東北大はそのころ地磁気脈動で特徴を打ち出していたはずであるが、そのときは私がサボったのか、わかったのは、この年、京都で開催された、太陽地球系物理学の”宇宙線地球嵐“の国際シンポジウムが開かれ、旧ソ連の女性科学者トロイツカヤがPC 1、2?をパール(pearl型地磁気脈動)と紹介している講演であった。学会の全貌などまったくわからなかった駆け出し者の偏った認識ではあったが、思い出をたどるときの感慨は尽きない。

さてなぜこのような時代をあえて取り上げる

かというと、発展した学会に必然的に失われていく総合意識を最後に問題にしなくてはならないからである。

1.2 第一世代リーダー達の努力

学問や芸術の道は、はじめから社会へのサービシ的対応、研究組織づくりへの戦略など考える者はいない。いやむしろ、そんなことは不純な精神で、質の高い学問や、芸術作品がかえって得られなくなるというのが、知識人の共通認識ですらあろう。こうした、一般常識の背景にありながら、あながち、組織作りの戦略が不要と高踏的に行いすまることが、正しいとはいえない研究分野がある。それが、実に地球物理であり、宇宙空間物理学である。つまり、SGEPSSの置かれた宿命であろう。しかし、そうした研究組織づくりへの戦略づくりが、ときに適した人物が黎明期に出現したリーダー達ではないだろうか。

先に述べた、1961年5月、春の総会、講演会の折、会場である、階段教室の一番前に座り、ほとんど全ての講演に、少し短い舌から出てくるような発音で、コメントをする先生がいた。事情の知らない私は、あれは誰か、と仲間の研究者に聞いたことを思い出す。

永田 武教授(後に学会会長、極地研究所所長等を歴任し、文化勲章、東大名誉教授、)であった。以降の学会では、初代会長の長谷川万吉教授(京都大学名誉教授)に幾度かお会いし、また学会創設時の興味深いお話も総会の折にお聞きしたが京都大学・理学部に地球電磁気学講座を興した、リーダーとして、大変温厚、かつ重厚な感じを受ける先生であった。長谷川先生は、東大の、永田教授を京都に良く招いて、集中講義の機会などづくり、信頼を築き、これが学会立ち上げの原動力になっていたと、永田先生が語っていた。たぶんこの長谷川先生の思想は当時まだ助教授であった永田先生の考え方に影響したのであろう、地磁気研究でライバル関係になっていた東北大の加藤教授とも協調する道を取り、訪れた国際的な宇宙空間物理学(このネーミングは永田教授の提案と聞く)の発展期に乗って、東大天文教室の畑中武夫教授、京大工学部で電離層研究を専門にする前田憲一教授とも組み、わが国にSpace Physics(宇宙空間物理学)の学問研究の領域を樹立し

た。永田 武教授はよく言っていた。新しい学問領域や研究事業の開拓は、“俺がやったという人が、同時に5人はいなくてはだめだ。”と。このことは、SGEPSSが惑星領域に進展して行くとき、私自身の活動方針としても大変参考となった。

1.3 研究施設および共同利用研究所の設立とSGEPSS

学会立ち上げ期のSGEPSS研究分野での陣容は、まず、前節で出た、各リーダーたちの所属した東大、京大、東北大それぞれの地球電磁気講座と、京都大学工学部電子工学科に所属した情報通信講座（正式の名称でない）が加わる、全4講座のスタッフ、および学生たちであった。この規模では、とても、破竹のように拡大する国際的な宇宙空間物理学の発展には呼応すべくもない状況であった。そんな時代、1961年4月、私は電子工学科修士課程を修了し、工学部に新しく設立された電離層研究施設の助手として奉職することになった。24歳、今思えば青春の真っ只中であった。この年、私は天文学会にはまだ関わっていなかったのであるが、畑中武夫先生にお会いした。突然、前田憲一先生から電話があって、教授室に赴くと畑中先生がVLF電波が電離層を透過する状況を知りたいとおっしゃっていた。私が前田教授と一緒にこの問題の計算をしていたためである。しかしその後、程なく畑中先生はまだ40代の若さで突然の脳障害のため、急逝された。宇宙空間物理学の立ち上げにかかわっていた先生方の衝撃は大変大きかった。この畑中先生の早逝は天文学会の宇宙空間物理学への関わりに、大きな障害を残したことは、後になるほど感ぜられるようになった。

さて、この1961年を契機に東京大学に2部門、京都大学に1部門研究施設が発足したのであるが、この結果、第一世代のリーダーに次ぐ第2世代のリーダーたちの誕生となった。東大には、福島 直教授、小口 高教授、そして、京大には大林辰蔵教授が就任した。大学の話ばかりではない、この宇宙空間物理学時代、大きく貢献し始めたのが、電波研究所であった。したがって、陣容は一举に2倍増となり、若き研究者も学生も日本地球電磁気学会をコアに未来へ大きく胸を膨らませ、また大きく羽ばたきは

じめた。単に学部教室に閉じず、研究施設という当時わが国では初の構想をもって、学会の内容を拡大充実してゆこうという、第一世代のリーダーたちの意図が実り始めたのである。

この運動の原動力になったのは、その評価を好むと、好まざるとに関わらず、永田 武教授であった。同教授は確かに自分が、自分がというところも強い志向を持っておられたが、そのことは並行して、同時に日本が、世界に立ち遅れていることからの、立ち上がり、という学会全体の戦略の中に捉えようとする、視野を持っておられた。また、東大の一人勝ちを諍らず、京大、東北大にも声をかけ連携して、当時の文部省と折衝してきた。この連携に、スマートに対応したのが、当時の飯田益雄、調査官であった。飯田調査官が、宇宙、南極、そして地球物理学の成長に対してなした貢献は非常に大きなものがある。当時文部省には、測地学審議会と呼ばれる、実行予算編成に直接決定力をもった、組織を持っていたが、このなかに超高層部会を設立し、発展の方策を建議していった。1961年实现した。第1期の研究施設の設置はこうした結果であった。

1964年、共同利用研究所として、東京大学宇宙航空研究所が設立された、旧東京大学航空研究所の救済策と抱き合わせを文部省より攻寄せられた格好での厳しい条件下にあって、決して理想的な姿で生まれたものではなかった。この期を逃すともう宇宙の研究所は作らないよ、という脅迫？めいた情報に、理想論は消えた。多数の旧航空研の部門にロケット、テレメータ、等の工学部門が相当数を占め宇宙科学はたったの4部門であった。そのうち2部門が超高層大気関連と磁気圏物理学関係として、SGEPSS関連部門となった。数的にはわずかではあったが、しかし、この2部門を通じSGEPSSでの宇宙空間物理の実験観測が芽吹いたのである。容易とは言えなかった人事異動の結果、1968年には平尾邦夫、大林辰蔵の両教授がSGEPSSにおける宇宙への船出をリードすることになった。

一方、それまで、科学博物館におかれ、東大理学部地球物理教室にて永田 武教授をリーダーとする研究組織を中心に進められてきた南極観測プロジェクトは永田教授の大学定年退官を機に、当時の文部省は、共同利用研究所として国立極地研究所を設立した。設立には宇宙航

空研究所のときと同じように学術会議の勧告というステップを踏んでいる。当時はまだ学術会議の勧告を政府が受け入れるという、ある意味で学者社会の体制的民主主義が信じられていた時代で、学会と直結する学術会議の機能が重要であったことは、忘れてはならない歴史的事実である。国立極地研究所の設立は1973年4月であったが、この期をもって、SGEPSSの地球電磁気時代での立ち上げはおよそ完了したと言ってよいであろう。

2. STEPプロジェクト

ここまで書き進むと、SGEPSSの歴史の縦糸が見え、尽きなく歴史の横糸を織らねばならぬという気持ちが湧いてくる、しかし、歴史編纂は別の大きな事業で、この記念誌に個人として寄稿することの主旨でもないと思われる。そこで一挙に飛んで、学問内容は別として、私に関わって来たSGEPSSへの貢献という視点で、2つのことを取り上げさせて頂こうと思う。その一つがSTEP (Solar Terrestrial Energy Program) プロジェクトで、その二つ目は3節に述べる惑星分野への発展である。STEPは1990年に5ヵ年計画として出発したICSU傘下のSCOSTEPで設立した総合プロジェクトで、これまでの集積として残された施設、陣容、すなわち、宇宙空間、各大学、共同利用研の地上の諸観測施設、南極観測などSTP分野の全資源が一斉に稼動し、20世紀を締めくくるに相応しいと言えるプロジェクトが実施されることになった。

2.1 国際協同研究の伝統

前節1、では組織面の発展の一断面をお話したが、学会構成員の研究活動を高めてきた、戦略的な（この言葉は学問には不釣合いと、いつも思っているが）活動がSGEPSSの特徴をなしてきた。まずIGYにはじまり、IGC, IQSY, IASY, と一連の初期プロジェクトを経た後、第2段はIMSとして磁気圏物理を中心に大きく飛翔した。

国際磁気圏研究 (International Magnetosphere Studies:IMS) はSCOSTEPにおいて、1976年から1979年の3年間にわたるプロジェクトとして設定された。当時SCOSTEPの Bureau Memberであった大林辰蔵・宇宙研教授が国際レベルでこの準備に努力された、そして同教授はSGEPSSにおける第2世代のリーダーとしての役割を果たし始めた。すなわち国内ではこのプロジェ

クトの主査として、IMSプロジェクトの実施を指導された。この段階では、宇宙空間飛翔体観測ではかろうじて磁気圏の入り口に達するといった実力であったが、この期に開発されたEXOS-B衛星の成功はのちにSTEP時代EXOS-Dとして開花する重要な礎を築いた。

大林辰蔵教授は1968年、京都大学・電離層研究施設から、共同利用研究所である東京大学宇宙航空研究所に移られたが、京都大学時代は若き学生達の胸に学問への情熱の火を起し、宇宙研では共同利用研としての使命を視野に入れて多くの難問解決に立ち向かっておられた。このSGEPSS第二世代のリーダーとしての功績を忘れてはならない。私はそうした視点から第17期会長を拝命した折、大林奨励賞の設立を提案、実現させていただいた。

IMSが完了すると、外へ外へと向かった問題意識は、地球環境という人間生活とのかかわりを意識する時代へと、向かう傾向を示しはじめた。こうした背景からそれまで無知のまま通りこしていた中間圏とその上下結合に焦点ができ、中層大気国際共同観測計画 (Middle Atmosphere Study Program :MAP) がスタートした。このプロジェクトは早逝された東京大学・等松隆夫教授のSCOSTEPにおける努力が大きく働いていた。思えば畑中武夫教授の場合に重なってくる。等松教授は中層大気研究はもとより、第二世代のリーダーとしては最も若く、実験面でも身を粉にして実行する方で、SGEPSSのホープの一人であった。

等松教授の活躍は京都大学・工学部電離層研究施設の加藤 進教授 (京都大学名誉教授) が継続され、SCOSTEPにおける国際レベルの準備から国内ではMAP主査として労をとられた。加藤教授は京都大学の若い研究者の意思を強く帯し、中層探査のためのインコヒーレント・レーダー : MUレーダーの設置を、超高層電波研究センター (RASC) に設置し、万全の体制で臨んでいる。なおRASCは工学部電離層研究施設を共同利用研として改組出発したものである。

以上簡単に述べたプロジェクトの進行の道筋のなかで、これまでのプロジェクトを総括し、また20世紀的研究の総括としてSTEPが設立され、実施されたのである。

2.2 STEPプロジェクト設立への道

SCOSTEPでは次期プロジェクトを必要とする議

論が、MAPプロジェクトの進行中に既に始められていた。そしてSCOSTEPのBureauによりSTEP作業委員会が設置され、1986年1月厳冬のモスクーでSTEP計画の骨子を立てる作業が行われた。そのときの作業委員会のメンバーを順不同のまま思い起こすと、D. Rees, (England), S. Showhan, D. Williams (USA), A. Evel (Germany), O. Vaisberg (USSR), H. Oya (Japan)の6人委員会だった、窓辺に深々と積もる雪を眺めるときもしばしば、1週間にわたり、毎日デイスカッションを続け、STEP計画骨子の成案をえた。

大きな特徴は、今までのプロジェクトを包括する総合プロジェクトで、太陽から太陽系空間、プラズマ圏を含む地球磁気圏、電離圏、中間圏、成層圏そして一部対流圏まで、エネルギーの輸送を問題の核にして、定量的な解明を目指して構成された。実施手段は、従来のSCOSTEPの関わる28に至る各国の地上観測ならびにデータ解析、理論シミュレーション研究の手段の範囲にとどまらず、宇宙飛翔体観測を実施するNASA, IKI, ESA, ISASといった宇宙機関の参加も核にする点であった。私は地上観測網の大切さを多く語り、NASAを意識したUSAの委員は飛翔体ミッションISTEPの可能性を強く語った。

この原案はSCOSTEP総会にて承認され、国際科学連合ICSUにて国際プロジェクトに位置づけられて勧告された。この勧告を受け日本学術会議において、まず第13期日本学術会議では地球電磁気学研究連絡委員会のもとに、STEP専門委員会を設置し、準備に入った。即刻シンポジウムを開き、計画の詳細を詰め、1988年4月20日、第104回学術会議総会に提出され、学術会議総会は政府に対しSTEPの実施が勧告した。そしてこの勧告は当時総務省にて運営された科学技術会議に提出されて承認され、各省庁に通達された。当時の文部省は、飯田調査官のあと大友調査官になり、STEPの国内プロジェクト実現の予算化を鋭意推進してくれた。

以上のプロセスでは、私は、SCOSTEP Bureau, 及び Steering Committee Member そして学術会議・電磁気学研究連絡委員会委員、STEP委員会委員長、さらに文部省測地学審議会でのSTEP検討小委員会副主査、STEP推進委員会主査という役を許されて、国際STEP 共同研究設立、から、国内での設立までの全ての段階で資料作りと、審議の場に赴き説明してきた、ここでSTEP準

備の5年間を振り返るとき、関わって協力いただいた全ての方々に深い感謝の念が絶えない。

2.3 プロジェクトの実施

プロジェクトは国際レベルでは6課題が設定された、そしてそれぞれにWorking Groupが設置された。それらはSTEPの内容を手短かに表現しているのでここに列挙すると以下のとおりである。なお()内にWGのChairmanを掲げた。

WG1 The Sun as a Source of Energy and Distribution (M. Machado and P. Simon)

WG2 Energy and Mass Transfer through the Interplanetary Medium and the Magnetosphere-Ionosphere Systems (H. Oya and O. Vaisberg)

WG3 Ionosphere/Thermosphere Coupling and Response to Energy and Momentum Input (K. Cole)

WG4 Middle Atmosphere Response to Forcing from Above and Below (M. Geller)

WG5 Solar Variability Effects in the Human Environment (K. Labitzke, and D. Sontman)

WG6 Informatics (D. Rees)

さらにSTEPがいかに包括的でそれまでの歩みを集積しようとしたかをうかがわせる組織は、ワーキング・グループと異なる範疇としてパネルを設置した。それらは

P1 Long Term Measurement (M. Shear)

P2 Common Mechanism in the Sun-Earth System (S. Bowhill)

P3 Experimental Techniques (S. Kato)

P4 Computer Simulation and Modeling (H. Matsumoto and S. T. Wu)

であった。紙面の都合もあり国内での実施体制は割愛させていただくが、きっとそれぞれ各班にてリーダーを務められた方々からこの60周年記念誌に寄稿いただけると思う。

2.4 成果を振り返って

STEP成果報告は様々な形で行われた、今書架に手を伸ばしてみると、STEP総括班、編集出版の“太陽地球系エネルギー国際協同研究(STEP)シンポジウム報告”がある。鶯色の布製ハードカバーのこの報告書は1990年(平成2年)の第1回シンポジウム報告にはじまり第6回最終回まで5冊、総頁3654ページに亘っている。準備期間の

第1回シンポジウム報告は延べ共著者も含め169名の著者の貢献を示しているが、プロジェクトが実施段階に入った第2回のシンポジウムではやはり、共著者を含め390名の著者の貢献からの計画と準備状況が発表され、プロジェクトの成果が現れ始めた、第3回シンポジウム以降では400名を越す著者からの成果報告が網羅されている。

国際協同研究の効果的、かつ実質的な成果は対応する参加国がいかに関局的に対応するかである。その点このSTEPに最も効果的に対応できたのは日本のSGEPSSにおけるSTPコミュニティー、とISTPプロジェクトとして飛翔体観測を計画したNASAを中心とするUSAであった。わが国は課題研究に5年間10億円を越す予算措置のほか、ISASを通じ、ロケットを含む全体で160億円に迫るEXOS-Dミッション、NASAと共同で実施したGEOTAILミッションが実現した。このほか南極観測には新しい観測船が建造され、また名古屋大学・太陽地球環境研の発足と(STE研) 予算化、京都大学MUレーダープロジェクトでの予算化と、STEP効果は大きく波及している。プロジェクトに関わる活動は多くたとえばSTE研では地磁気変動観測のため経度210°線地磁気観測網が、立ち上げられ、東北大学では木星プラズマ電磁環境監視に関わる100km干渉計網が整備された。

ISASにおいて、西田教授(東大・宇宙科学研究所名誉教授)のリーダーシップのもと、国際協同の現場で活躍したGEOTAILミッションは大きな成果を残した。もともと、この計画はNASAにおいてゴダード研究所を中心としたてられた太陽地球系空間観測ミッションでWIND, POLAR と連携するマルチ・スペースクラフト計画の一環で、NASAでは、惑星ミッションと対比されていた、NASAヘッドコーターはこの地球周辺空間を舞台とするSTPの活躍が、国際的であるべきと指摘していた。こういう背景で、NASAの予算枠の制限から、STEPの思想に沿って、GEOTAILの企画制作に関し、わが国の協力を打診してきた経緯があった。

一方 EXOS-Dは従来のわが国のISAS方式で計画され、鶴田教授の管理責任で実施したもので、準極軌道でGEOTAILと相補的に活動すべく役割を果たした。このミッションでは私は、設計制作の実質的なお世話を果たさせていただいたが、観測成功に際し、国際舞台で、”The World First Class Satellite”と長年NASAで活躍していた

scientist達が惜しみなく、賞賛をおくってくれていた。EXOS-D(あけぼの)は2009年現在まだ稼働している、GEOTAILに比して国際的なVisibilityはまだ低い、その達成された内容は、これからの、SGEPSSメンバーの研究活動によって示されるであろう。

STEPプロジェクトにより、活躍しあげられた成果を公平にのべ尽くすには100ページを頂いても無理であろう。60周年記念誌としてその断片のみを書かせていただくしかない。そうした制限のもとで最後に触れさせていただきたいのは仙台で開催されたSTEP国際シンポジウムである。これは、SCOSTEPの第8回シンポジウム即ち、”Eighth International Symposium on Solar Terrestrial Physics”をSTEPプロジェクトに焦点をおいて実施したもので、1994年6月5日から10日にかけて仙台の国際会議場にて、開催された。Local Committeeは学術会議・地球電磁気研究連絡委員会ならびに国際協同研究連絡委員会のSTEP小委員会であった。実施に際しては東北大学のSGEPSSメンバーの寝食もかなわぬ働きに大きく支援された。出席者は海外から128名、国内178名で成功裏に完了した。全責任を負った私としては、この会議は国際化いわゆるグローバル時代へやっとう向かった当時として、緊張感あふれる、インパクトある経験であった。

最後に当時の報告書の一部を引用させていただくと、“想いますと33年前、1961年8月京都においてIGYの成果に因んで、宇宙線地球嵐のシンポジウムが開催されたのは、太陽地球系物理学が、宇宙空間飛翔体の登場を得て、躍進してゆく前夜の催しであった。それはわが国の若き研究者に限りない情熱と大きな影響をあたえました。爾来30年の歩みの間、わが国もSTP分野での世界の一翼を担える立場に成長し、ここにその一つの成果をまとめることが出来たものと、捉えることができます。IGYの後、IQSY, IASY, IMSそしてMAPとわが国のSTP研究陣は諸先輩の努力のもと、研究活動を継続し、それらの成果がここに凝縮し、STEPとして開花しました。そして、今、20世紀を総括するにふさわしい、結実をみました。”と記している。無論、自然現象の理解に向かう学問は閉じることなく不滅で、いま21世紀STEPの成果から得た新たな謎に向かい、さらに進化する研究手段をもって若き世代が、太陽系に拡大した対象に向かっている。

3. 惑星科学分野への展開

3.1 惑星研究への出発

1974年頃、SGEPSSは第一世代の立ち上げ期と第二世代の発展期を経て、いよいよ、私たち第3世代にその活動の責務が移り始めた。SGEPSSでは、そのまま活動内容を継承するのではなく次代を見据えた方向を求めることが問われていた。私は、京都大学から東北大学に移るに際しこの点を意識し、惑星研究の道を開拓することも視野に教授職の責めを負った。まず着手したのは、STPを木星を取り巻く宇宙空間に拡張して行くことで、東北地域の電波環境の利点を活かし、木星デカメータ電波観測をめざした。これは電波天文学的な視点でなく、プラズマと電磁環境のプロープとしての視点での観測として開始された。

3.2 特定研究“太陽系の進化と惑星環境の研究”

SGEPSSのSTP分野とそれまで大学と共同利用研である宇宙研を足場に進めて来た惑星科学の研究を一体にする方向で当時の文部省、が設置した大型の科学研究費補助金である、特定研究を“太陽系の進化と惑星環境の研究”のテーマのもとにスタートした。

SGEPSSのサイドから見ると、STPが地球に限定せず、太陽系にその研究領域を拡大し新たな問題を開拓する事を願っての努力であった。プロジェクトは1980年から1982年の3年間にわたった。この起こりのおおもとは惑星科学のリーダーであった京都大学の長谷川博一教授とSTPの責務を持った私との相談が纏まったのであるが、大林辰蔵教授に代表者をお願いし、二つの分野の交流がスムーズに進んできた。奇しくも長谷川博一教授は長谷川万吉先生のご子息で、一回りも若い私の意見を分け隔てなく聞き、行動を共にしていただいた。ほんとうに優れた人格の方であった。

その結果かなり発展の道は開拓されたが、なかなか、それぞれの学問内容と伝統は急速には変化するものではないことも、認識された。もう一つの重要な成果はSGEPSSにおいて固体地球分野とSTP分野が惑星科学という視点で互いに交流できる点が見出されたことである。

3.3 重点領域研究“原始太陽系と惑星の起源”

特定研究の3年間は、惑星科学分野の研究者にSTP分野の得意とする宇宙空間観測の潜在力の理解を広める結果となり、太陽系探査を目指した方向が見えはじめた。そこで、太陽系空間の現状を解明するのに留まらず、地球の誕生に関わる、太陽系形成を主題に“原始太陽系と惑星の起源”を、当時文部省がもっとも大きな科学研究補助金として、が設定した重点領域研究として応募した。代表者大家 寛、幹事中澤清、水谷仁、で6班総勢100名、総予算5億円の規模であった。

この研究の成果、それまで特異な化学中心の分野であった隕石研究者の集団が、物理的に組み立てられつつあった太陽系形成論と交流、その研究方向に新たな視野を得たこと、また現在のプラズマ物理学が、原始太陽系におけるプラズマ状況へと解析接続的に発展させてゆく道筋がえられたこと、各分野の専門的究明が太陽系形成論の視点での相互関係を得たこと等が上げられる。

原始太陽系の問題を過去のカント、ラプラス等の哲学的思考に先導された時代に決別し実証的研究への道を開いた先駆者の一人にH. Alfvénがいる。彼は、現存の太陽系は太陽系形成時の化石的内容をもっていることを、1972年秋に日本を訪れたとき熱く語った。

その先見性から当時惑星探査の意義に私なりの確信が与えられていた。彼は、理論研究のほか、プラズマ中の宇宙塵の観測とダスト・プラズマの実験、そして最も重要な太陽系形成時の化石として彗星の探査を提案していた。それから10年以上も経過したのであるが、重点領域研究ではこれらの実行に着手している。研究の内容は研究実施期間、毎年開催したシンポジウム報告のほか、単行本として現代の太陽系科学(上)(下)が東京大学出版会より出版され、国際版としてPrimitive Solar Nebula and Origin of Planets, Terra Publishing Co. Tokyo, 1993がある。

こうした学問内容の成果と平行して、重点領域研究の成果は学会編成への活動をうながすこととなった。惑星研究を中心とする学会がほしいという運動である。私は、SGEPSSに惑星科学の分野が加わることが、SGEPSSのSTP分野の活性化、とくに固体地球分野の発展、そして惑星科学の新しい息吹の加速、という視点で最も理想的と考えていた。しかし、当時のSGEPSS会長と中澤、水谷幹事の交渉に任せた結果は、分野形成の力学は必ずし

も理想に従うものでないという現実を示した。惑星科学会が独立に誕生し、SGEPSSでは固体地球物理とSTPの間に分水嶺がないといえば嘘になるような、雰囲気が残った。

3.4 宇宙科学研究所と惑星ミッション

惑星科学会の内容は多岐にわたっていた。言い換えれば、地球物理の全分野が地球という文字を惑星と置き換えれば存在するわけである。それを地球物理の一分野にも及ばない会員数で対応するわけであるから、活動はプリミティブという評はまぬがれないのは、やむを得ぬ状況である。こうした背景で痛感したのは健全な惑星科学の進む道は惑星ミッションの設立にあるということである。

1961年から、東大生産研究所時代、東大宇宙航空研究所時代、そして改装なった文部省宇宙科学研究所時代と39年にわたって、私は自身、多くのロケット実験、をはじめ、EXOS-B, C, およびDといった地球周回衛星のミッションで科学観測の世話役とともに観測チームに参加してきた。こうした経緯から、惑星ミッションの設立への努力は人後に落ちなかったと言ってよいであろう。たしかに、惑星への展開は完全にわれわれ第三世代に果たされたテーマであった。永田先生はさすがに老いて、“惑星探査など日本ができることでない”とある工学の老権威にもらしたと聞き、さすがの大林先生も人間は地球で十分、惑星など自分の代の仕事でないとおっしゃっていた。

ところで、われわれ第三世代は、はたして、惑星探査の計画と実施は俺がやったと言えるひとが、5人くらいいただろうか。もしそうでなかったら、学会創成期のリーダー達より劣ると言われかねないであろう。月、惑星ミッションの設立と実現はとにかく難航し、私の心中には、学会あげて協力関係が育たなかったことに関し、渦巻く思いが残っている。

ともかく、1980年頃、文部省宇宙科学研究所では、PLANETミッションが設立された。その第一段階が76年ぶりに太陽に接近したハレー彗星探査ミッションである。わが国ではPLANET-A計画として、“さきがけ”と“すいせい”が誕生し、その観測の任務を果たした。これは工学のロケット関係者も強く望んでいて、しかも彗星到来時刻が切られているなど、一致協力の下地が十分であった。研究所の工学サイドでは、M-3S-I Iロ

ケットの開発、64メートル直径をもつ深宇宙ミッション用アンテナの設立と順調にすすんでいた。私は、工学の先生から“仕掛け人”といわれながら、次の金星探査 (PLANET-B) 計画への出発点と心得、このPLANET-A計画のため働かせていただいた。

しかし、その後は宇宙科学研究所の方針決定は波乱万丈となった。宇宙研の工学側では世代交代期がおそく、第2世代にあたるリーダーは、早期の月探査を、当時ライバルであった宇宙開発事業団の計画に先駆けて、実施しようとの意図があった。そのため非常に困難が予想された月面にくいを打ち込む、ペネトレータ計画が採用されたが、およそ15年たっても実現せず、キャンセルされてしまった。PLANET-Bミッションの選択にも私の提案であった金星は反対され、沢山の無理の末、火星行きとなったが、やはり無理はどこかで現れるもので、このミッションも火星観測を実現できず終了した。

こうした状況は惑星科学会の成長にとって、大変不幸な事態であったが、2000年、私が東北大学を退官するとき、文部省宇宙科学研所と宇宙開発事業団の共同プロジェクト、セレーネ計画が動きだした。そして開発してきたRFサウンダーをもって月地下探査のプロジェクトが認められ、後進に渡すことができた。これが、いま“かぐや”の成功として、SGEPSS学会と惑星科学会の発展に大きく貢献しているのは、うれしいことである。

4. 学会の将来に望む

惑星圏への活動が広がるこの時期、日本地球電気磁気学会ではその改名を検討することになった。小嶋 稔会長の時代でのことで、その結果、1987年、現在の“地球電磁気・地球惑星圏学会 (Society of Geomagnetism and Earth, Planetary and Space Sciences : SGEPSS)”となった。非常に長く、特に英語名は当時の議事録など見ない限りなかなか正確には言えない。私も評議員会議から改名委員会のメンバーとして選出され、改名の審議に加わったのであるが、この長い名前を提案し、決定されたことには多分に責任がある。

提案は決して理想的発想に基づいたものでなく、長期にわたる厳しい審議の打開策、あるいはこれしかないという選択であったように思う。日本地球電磁気学会英語名は Society of

Geoelectricity and Geomagnetism で多少は変更はあったが、基本的に何といても名前を変えないほうが良いとする固体地球電磁気学分野の意見と、太陽系、地球・惑星科学への展望を示す名称を願う意見のいわば対立であった。当時、創始者たちの意見も尋ねてみると、一様に地球電気磁気という言葉には固執されていた。

爾来20年近く経つが、この名前が長すぎるということで、再び議論があった。しかし本学会は、現在、固体地球電磁気分野、地球大気分野、宇宙空間プラズマ分野、惑星圏分野（惑星プラズマと大気に細分される）の分野が並立しているといっでよいであろう。けっして単純な名称で括れないのがSGEPSSの本質であることを改めて認識するような事態だったと思う。

地球物理学と、宇宙空間物理・工学にオリジンを置くこの学会はやはり、境界領域にある。その境界領域性を積極的に活かしてゆくことが、他からも評価される特徴ではないかと思う。しかしこれが活きた力を発揮するには、学問のリーダー達は、複数の分野内容を理解する広い学問的見識を養っていかねばならないだろう。21世紀に入って日本地球惑星科学連合が軌道にのってきた、しかしSGEPSSという絆は学問の質をきめ細かくかつ高く保つには不可欠であろう。ところで、日本地球惑星科学連合の設立にはSGEPSSの固体地球電磁気分野のリーダーの方たちの労するところ大なるものがあつた。これは、関わったかたがたの資質はもとより、しかし、一方にはSGEPSSという、境界領域的性格の強い学会で育つたという、他に得がたい力があつたのではないかと思っている。

SGEPSSは地球物理学、天文学、プラズマ物理学の各領域といつでもアクティブに関われる、常に老いない学会であることを願っている。

第126回SGEPSS講演会 概要報告

第126回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会は、2009年9月27日（日）より30日（水）までの4日間、金沢大学 角間キャンパス 自然科学本館にて開催されました。大会委員長は長野勇会員（金沢大学）であり、石川県と金沢市からご後援をいただきました。講演会の発表論文数は389件（うち口頭193件、ポスター発表196件）、参加

者は423名（うち名誉会員4名、一般会員242名、学生会員39名、一般非会員23名、学生非会員115名）を数えました。口頭発表は3会場を使用して行われ、ポスター発表は大会2日目の午前と午後で開催されました。また特別セッションとして、“月周回衛星「かぐや」観測によるSTP研究の新展開”が開催されました。大会3日目には、11時から大会委員長である長野勇会員による特別講演「金沢大学のスペースサイエンスへの貢献」が行われました。13時からは、本年5月の田中館賞受賞者3名による記念講演会が実施されました。受賞者名と講演題目は、綱川秀夫会員「対数時間軸上の古地磁気学」、阿部琢美会員「あけぼの衛星観測に基づく極域イオンアウトフローに関する研究」、塩川和夫会員「光学観測機器を用いたオーロラと超高層大気変動に関する研究」でした。

以上に引き続き、15時35分から総会が開催されました。大会委員長挨拶、会長挨拶、長谷川・永田賞授与、大林奨励賞授与および審査報告、特別表彰授与、諸報告が行われた後、議事として平成20年度決算と平成22年度予算の検討と承認を行い、17時20分に閉会しました。その後18時30分から、金沢スカイホテル「トップ・オブ・カナザワ」に場所を移して懇親会が開催されました。津田敏隆会長の挨拶の後、中村信一金沢大学長から御祝辞をいただき、木村磐根名誉会員の御発声により乾杯しました。ご歓談中には、大林奨励賞を受賞された長谷川洋会員、細川敬祐会員、片岡龍峰会員からスピーチを頂きました。和やかな良い雰囲気が進められた懇親会は、長野勇大会委員長と金沢大学と石川工業高等専門学校からなる組織委員会による閉会の挨拶で締めくくられ、20時30分に幕を閉じました。

本大会の前日9月26日には、講演会の内容のうち特に社会的関心が高いと思われる6件の研究発表について、記者発表が行われました。また今年度、本学会は文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費（研究成果公开发表（B））を得ております。アウトリーチイベント「宇宙を探る電波のチカラ～ビビッとスゴイ電波の不思議～」が同日午後に金沢歌劇座で行われ、104名の来場者を得ました。以上の記者発表とアウトリーチイベントに関連して、新聞記事が4件掲載されテレビニュースが1件放映されました。

なお、今回の大会においても託児所が開設されました。また学生発表賞の審査が会期中に行わ

れ、第1～3分野の計11人の審査員による厳正な検討の結果、9名の受賞が発表されました。

(山本 衛)

第126回総会報告

第126回総会は、秋季大会3日目の15時35分から17時20分まで、金沢大学角間キャンパス自然科学本館大講義室にて行われました。出席者96名、委任状提出245名（うち文書委任状131通、電子委任状114通）の計341名（定足数218名（国内会員数652名））で成立しました。まず、組織委員会総括の笠原禎也会員による開会の辞の後、議長として清水久芳運営委員が議長に指名され、引き続き長野勇大会委員長による挨拶、津田敏隆会長による挨拶（本号に別途記事有り）がありました。引き続き長谷川・永田賞授与式に移り、第30号が上出洋介会員に授与され、同会員からの受賞挨拶が行われました。続いて大林奨励賞授与式に進み、第32号が長谷川洋会員、第33号が細川敬祐会員、第34号が片岡龍峰会員に授与されました。大林奨励賞受賞理由報告は同賞候補者推薦委員である町田忍会員より行われました（201号に同前委員長である上嶋誠会員による審査報告記事有り）。次いで特別表彰授与式を行い、第1号が夏原信義（夏原技研）氏に贈呈されました。諸報告に移り、山本衛運営委員より前回総会以降に開催された第25期第3回・第4回運営委員会の報告がなされました。続いて荻野竜樹会員から日本学術会議国際対応分科会SCOSTEP小委員会報告、小原隆博会員から日本学術会議STPP小委員会報告、阿部琢美会員から国際標準電離層ワークショップ報告がありました。最後に9月26日に実施されたアウトリーチイベントに関する報告が長妻務運営委員からありました。議事として、まず平成20年度決算案について阿部琢美運営委員が説明を行い、6月30日に実施された監査会の結果、決算が適正であったとの報告が品川裕之監査委員からありました。以上をうけて決算案を賛成多数で可決しました。さらに平成22年度予算案について阿部琢美運営委員からの説明があり、若干の議論の後に賛成多数で可決しました。来年度秋季大会の開催地については、堤雅基運営委員と中村卓司会員から情報通信研究機構の所管で東京以外で行ってはどうかという提案がありました。これを受けて石井守会員から同機構の沖縄亜熱帯計測技術センターが

ある沖縄で10月後半に実施したいという意思を表明いただき、満場一致で拍手で承認しました。その他の議題はありませんでした。最後に山崎俊嗣評議員から組織委員会に対し、本講演会・総会の周到な準備・スムーズな運営と成功に対して謝辞が述べられ、清水久芳議長による閉会の辞をもって終了しました。

第126回総会議事次第

1. 開会の辞
2. 議長指名
3. 大会委員長挨拶
4. 会長挨拶
5. 長谷川・永田賞授与
6. 大林奨励賞授与
7. 大林奨励賞審査報告
8. 特別表彰授与
9. 諸報告
 - (1) 運営委員会報告
 - (2) 日本学術会議国際対応分科会SCOSTEP小委員会報告
 - (3) 日本学術会議STPP小委員会報告
 - (4) 国際標準電離層ワークショップ報告
 - (5) アウトリーチ・イベント報告
10. 議事
 - (1) 平成20年度決算報告
 - (2) 平成20年度会計監査
 - (3) 平成22年度予算案審議
 - (4) 来年秋季総会・講演会開催地
 - (5) その他
11. 謝辞
12. 閉会の辞

(山本 衛)

第126回総会会長挨拶

津田敏隆

第126回総会の冒頭にあたりご挨拶申し上げます。まず、大会運営委員長をお引き受け頂きました金沢大学・自然科学研究科の長野勇会員、ならびに笠原禎也会員をはじめとする金沢大学および石川工業専門学校 LOC 委員に心より感謝申し上げます。

今回は投稿論文389件、参加者423名を数え、1988年秋に同じく金沢大学工学部で開かれた学会

と比べて約2倍の講演が行われたことは、本学会の活動が益々拡大している証左として大変喜ばしいことです。

なお、講演申込みの多さのみが原因ではありませんが、講演会プログラムの送付が会期間際になり、会員各位にはご不便をおかけしましたことをお詫びいたします。

会員の受賞に関する嬉しいニュースがあります。湯元清文会員が、国際太陽地球系観測年(IHY)運営委員会より、2009年のIHY賞を受けられました。会員の皆様とともにお慶び申し上げます。

さて、1947年に創設されたSGEPSSが2年前に60周年を迎えたことを契機として、60周年記念誌の発行が歌田前会長および第24期総務の石井守運営委員を中心に企画されました。現在、編集作業を引き継いでおり、11月中には配布できる見込みです。

数名の会員が代表して執筆するのではなく、創設以来の会報記事を収集し、また新たに書き下ろして頂いた記事を加えました。当初200ページ程度を予定していたところ、最終的には350ページの大部になっております。

シルバーウィークと呼ばれるようになった秋の連休中に、私も校正かたがた素稿を読みました。ソファで気楽に読み始めていたのですが、いかにして学会が創設されたか、また学問追及への熱い思いに触れるにつれ、居住まいを正して読むべきと感じました。

人工衛星、試料分析、計算機をはじめ時代の先端技術を世界トップレベルの科学的課題に応用する理工融合の研究展開が成され、同時に未知の探求のみならず研究成果を社会に役立てる努力も行われています。昔の日記や古いアルバムを見つけたように、感慨にふけるという一面がありますが、会報という生データをもとに学会の発展の経緯を分析するという科学的楽しみもありますので、会員各位にも是非ともお読み頂きたいと存じます。特に、SGEPSSの将来を担う中堅・若手会員に是非一読されることを勧めます。

ところで、SGEPSSの60年間の会報で繰り返し議論されているのが、学会名称の改訂ならびにジャーナル問題です。前者については後日の議論を待つとして、EPS誌を取り巻く現状を、JPGUとの関係を含めてご紹介致します。

1990年に合同大会が開始され、その4回目にあ

たる1993年には合同大会の広い分野にまたがる国際誌の必要性が議論され始めました。関係学会等での議論を経て、1997年にEarth, Planets and Space (EPS) 誌が、SGEPSS、地震学会、火山学会、測地学会および惑星科学会の5学会により共同出版されるに至り、本学会が刊行してきたJGG誌はEPS誌に統合・吸収されました。

その後、合同大会はJPGUに発展し、現在では参加学会も約50になっています。その広汎な学問分野を総べる論文誌の発行がJPGUで検討されています。この動きを受け、8月にJPGU執行部とEPS運営委員会の代表およびEPS関連5学協会の会長等が会談し、論文誌に関しても、今後、JPGUと関連学会が共存共栄する道を模索することで合意しました。具体的には、JPGUはe-letter、e-reviewの発行を企画するようです。

一般に国内学術誌は欧米誌との厳しい競争にさらされています。過去の会報記事で「JGGをもっと利用しましょう」(1983年)、「JGGに質の高い論文を」(1986年)、と喧伝されてきたことでも分かるように、必ずしもJGGの投稿状況は芳しくありませんでした。若手・中堅研究者が研究成果を欧米誌に投稿することは止めようがないと思いますが、日本の研究グループのプレゼンスを示すには独自の学術誌を運営することが重要です。EPS誌およびJPGUの新企画誌を、ともに我々の学術成果の公表の場として育てていく自覚が必要と感じています。

ところで、金沢は本学会のみならずJPGUにも重要な場所です。AGUからの呼びかけに応じて、金沢で1990年8月に第1回WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting)が開催されました。一方、JPGUの前身に当たる合同大会が1990年4月に開始されました。時期を重ねて国内学会の連携および国際化の動きが進められていたこととなります。

WPGM終了後の組織委員会では「今回の会議はわが国の地球物理関係諸学会にとって、合同して開催する最初の学術会議」であり、「同様の国際会議を今後も環太平洋地域で開催すること」、「国内関連学会間の横のつながりを強化し、合同の学会活動を行ってゆく」ことが基本方針として了承されています。その後、2003年にIUGG総会が札幌で開催され、さらに、2005年5月に22学協会が参画するJPGUが創設されました。金沢はこれらの原点になったと思います。

SGEPSSは昨年秋の総会でJPGUの法人会員として

参加することを決議しています。現在およそ50学協会を擁するJPGUですが、SGPESSはその中で1/50をはるかに上回る貢献をしてきており、今後もそのプレゼンスを示すことが期待されています。そのためにも、現在進められているJPGU代議員選挙に会員各位が積極的に関与して頂くことを希望します。【注：JPGU代議員のおよそ1/6がSGEPSS会員となりました。】

さて、秋の総会では長谷川・永田賞の授賞を行っており、今回は上出洋介会員に同賞を贈呈します。従来は懇親会で受賞のおよろこびの言葉を頂く機会を設けておりました。しかし、長谷川・永田賞は本学会として大変重みのある賞ですので、多数の会員諸氏がお集まりになる総会で、ご挨拶頂くように変更致しました。

一方、大林奨励賞は候補者推薦委員会において実質的な審議がされますことから、同委員会の代表者に選考理由のご説明をお願いすることにしました。今回は第24期の委員で第25期では委員長をお務め頂く、町田忍会員にご紹介をお願い致します。なお、3名の受賞者のよろこびのお言葉は懇親会でお願いします。

また、昨年の秋の総会で設立をお認め頂いた「学会特別表彰」の第1号を夏原信義氏（夏原技研）に贈呈致します。

学会賞以外によっても、学会活動に貢献された方々を適宜顕彰することが重要と感じています。本大会に先立って9月26日に金沢市内の歌劇座で、アウトリーチ担当運営委員・LOC委員の企画によるイベントが開かれました。一般向けの講演ならびに南極からのインターネット経由のライブトークが会場を沸かせました。表舞台での会員のご貢献のみならず、ポストドクおよび学生の方々には裏方として運営に積極的に参加して頂きました。厚くお礼を申し上げます。

こういったアウトリーチ活動のみならず、観測装置・分析機器開発、データベース構築など、研究基盤を支える活動を学会・コミュニティが正しく評価し、その努力にふさわしい処遇を考えることが重要と考えます。即座にできることとして、例えば、今後、各自が履歴書に記載して貢献を明示し、carrier path を評価する側もそれを重視していくように考慮することを提案したいと思います。

以上、皆様のご協力により今回の総会・講

演会が大変充実したものになりました。また、秋大会には春の連合大会とは違った楽しみがあることも再認識して頂けたかと思います。会員諸氏には今後ともSGEPSSの発展にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



第126回評議員会報告

日時：平成21年9月28日（日） 17:45-20:30

会場：金沢大学角間キャンパス自然科学本館レクチャーホール

出席者： 津田敏隆、家森俊彦、歌田久司、藤井良一、中村正人、浜野洋三、湯元清文、小野高幸、渡部重十、深尾昌一郎、山崎俊嗣

欠席者： 本蔵義守

陪席者： 山本衛（運営委員会総務）（敬称略）

1. 報告

- ・ 運営委員会（第25期第3回・第4回）について、総務から報告があった。
- ・ SGEPSS60周年記念出版について現状報告があった。11月中の完成を目指している。
- ・ アウトリーチイベントと記者発表(9月26日実施)について、会長から報告があった。新聞およびテレビで報道された。ポストドクならびに大学院生のボランティア参加を評価する必要があるとの指摘があった。

2. 学会賞審議

(1) 田中館賞

- ・ 推薦者より田中館賞の推薦理由説明を受け、質疑応答を行った。推薦者の退席後に審議を

継続した。なお、当該の審議事項に深く関係する評議員に適宜退席を求めた。

- ・ 授賞の可否について投票を行った結果、全会一致で授与を決定した。

4. その他

- ・ EPS誌とJpGUの関係に関して会長より現状報告を行い、意見交換した。

- ・ 8月17日にJpGU執行部とEPS関連5学会の会長あるいは代表者、およびEPS運営委員長等との間で意見交換が行われた。JpGUは将来的には独自のジャーナルを持つ意向で、まずe-letter, e-reviewを発刊する予定である。

(津田敏隆)

第25期第4回運営委員会報告

日時：2009年9月27日 17:50～20:35

場所：金沢大学角間キャンパス自然科学本館ワークショップ1（秋学会休憩室）

出席 17名（定足数11名）：津田敏隆会長、家森俊彦副会長、阿部琢美、石井守、河野英昭、木戸ゆかり、齋藤昭則、坂野井和代、塩川和夫、篠原育、清水久芳、堤雅基、長妻努、畠山唯達、村田功、山本衛、吉川一朗

欠席 1名：小田啓邦

1. 前回（第25期第3回運営委員会）議事録の確認

- ・ 確認の後、承認された。

2. 協賛・共催関係

- ・ 以下1件の協賛（Cosponsor）を承認した。
- ・ AGU Western Pacific Geophysical Meeting（山本）

開催日：2010年6月22日～25日

場所：台北

* 協賛には金銭的な負担はなし。日本での宣伝活動を担当。尚、program committeeとして、河野委員を選出。

3. 入退会審査（清水）

(1) 4名の入会を承認した。

正会員（一般）：須賀秀一（東芝・社会システ

ム社、紹介会員：木村磐根・津田敏隆）、

横山信博（紹介会員：小原隆博・越石英樹）

正会員（学生）：松村充（京都大学、家森俊彦・齋藤昭則）、小林慧（京都大学、浅見智子・藤井頌子）

(2) 1名の退会を承認した。

退会者：横山央明

- ・ 入会申請ホームページで、本学会の目的等の情報に容易にアクセスできるような工夫が必要であるという提案があり、ホームページにリンクをはる等の改良をすることとした。

4. 会計関係

4. 1. 平成20年度決算報告について（阿部）

- ・ 決算資料に沿って報告された。前回運営委員会以降、EPS関連特別会計の決算額を追加した。

- ・ 本決算案を確認し、承認した。

4. 2. 平成22年度予算案について（阿部）

- ・ 平成22年度予算案が提案された。詳細について、平成20年から3年分の予算案を参照しながら説明された。議論の後、予算案は承認された。詳細は以下の通り。

- ・ 収入・支出とも、前年度の予算を踏襲した。

- ・ 管理費のうち、印刷費は、会費収入とのバランスをとるために、少なめに計上した。

- ・ 事業費のうち、秋学会投稿システムは、来年度に大幅に変更されるが、使用料金の増減が不明であるため、昨年度実績に基づいて計上した。

- ・ 平成22年度は役員選挙と名簿作成が予定されており、関係予算が計上された。

- ・ アウトリーチ予算について、平成22年度の成果公開科研費が得られない場合に、アウトリーチイベントを如何に開催するかを議論した。アウトリーチ部会において、イベント開催方式と対応を議論する。

5. 助成関係

5. 1. 国際学術交流事業の審査（吉川）

- ・ 応募なし。

5. 2. 東レ科学技術賞・科学技術助成推薦（山本）

- ・ これまでに会員に受賞者、助成研究の推薦について周知したことが報告された。

・東レ科学技術賞に、上出洋介会員を推薦することとした。

・東レ科学技術助成に、齋藤昭則会員の申請を推薦することとした。

6. 秋学会関係（篠原・山本）

6. 1. 来年度の秋学会開催場所について（石井）

・来年度開催地の学会開催会場案が提示された。

・来年秋学会はNICT主催、開催地沖縄で承認。詳細については今後報告される。

・旅行計画作成のため、コマ割、プログラム作成を早くする必要あると指摘された。

6. 2. 来年度の秋学会投稿システムについて（山本）

・秋学会投稿システム使用に関して、JpGUとの連絡状況が報告された。

・JpGU理事の古村氏（地震研）と、10月13日に打ち合わせ予定。システム所有者のJCOMも打ち合わせに参加する可能性あり。

・使用料金はこれまでと同様になることを期待している。また、他学会のシステム利用により各学会の負担が減ることも期待している。

7. アウトリーチ活動について（長妻・畠山）

・9月26日に、記者発表会とアウトリーチイベントが金沢歌劇座で開催されたことが報告された。来場者は104名。

・記者発表について、北国新聞、北陸中日新聞が記事を掲載。9月28日の「かぐや」特別セッションにTVカメラ（MRO）が入る予定。

・今回のアウトリーチイベントでは、泉丘高校の生徒の協力を得た。高校、生徒への学会からの感謝状を贈るという提案があり、賛同がえられた。

・科研費でポストファクトリポートを作成することが報告された。また、改善点については、アウトリーチ部会で取りまとめ、運営委員会他に報告する。

・アウトリーチ活動に協力した大学院生、ポスドクへの対応として、就職に有利になるような取り計らいをしたいという提案があった。これに対して、会報に協力者の名前を記載する等、学会関係資料に記録を残してはどうかという提案があっ

た。本件について、議論を継続する。

・来年度もアウトリーチイベントを開催予定。テーマ、科研申請、開催様式、広報活動について、アウトリーチ部会で検討。特定の中学、高校等を訪問し、イベントを開催することも検討する。

・アウトリーチについて、学生（若手会有志）が企画から参加したいという意見あることが報告された。アウトリーチ部会で活動方針について議論をし、問題点等を検討の後、運営委員会に提示する。

8. 男女共同参画関係について（木戸）

・本秋学会において、保育室・託児室を設けた。申し込まなくても休める部屋を含めて、2部屋を準備した。使用料金は250円/30分、不足分は学会で負担。本年は35000円程度を負担予定。

・学協会連絡会から、科学技術基本計画に対して提言をするという提案があったが、資料を検討の結果、本学会としては提言の参加について態度を保留することとした。次回連絡会が10月1日に開催されるので、連絡会において対応を決める。

・第7回シンポジウムを10月7日に東工大で開催。テーマは「持続可能社会と男女共同参画」。

9. Web・メーリングリスト関係（堤）

・学会賞の受賞者と選考委員の情報更新時期を確認した。

・学会賞選考委員については、年度ではなく、期で記載することとした。

・英語ページの情報を早急に更新する必要があると指摘された。

10. 学会創立60周年特別事業関係（石井・山本）

・60周年記念誌のサンプルが提示された。9章建て。200ページで見積もりをとっていたが、350ページになった。売価は5,000円。作成見積もり額は、771,750円/100冊。

・単価5,000円にするための印刷冊数を調査することとした。余剰分については、大学、研究所等機関での購入を促す。

・本学会中に個人購入を受け付ける。

11. EPS関係報告（齋藤・津田）

11. 1. 交換会報告（齋藤）

・JPGUとEPSを運営する5学会会長の意見交換会が8月17日に開かれ、その議事録を元に、議論内容が報告された。

・連合は独自に電子版のレター誌、レビュー誌を出版することを検討中である。

・連合から、EPSと連合との連携を示すため、連合のロゴをEPSに掲載したいという要望があった。

・EPS参加学会から、連合の学会誌について、連合自体がより詳細な将来的な見通し、計画を持つべきであるという意見があった。

1 1. 2. JpGUとEPS誌の関係について (津田)

・連合には5学術セッションがあり、EPSは宇宙惑星、固体地球に関係している。

・EPSとJpGUの関係について、議論を継続する。また、現状について総会で報告することとした。

・EPSの分担金については将来的に検討が必要。

1 2. 総会関係 (津田・山本)

・討議事項を確認し、役割分担をした。

1 3. 次回運営委員会

・2月後半に開催予定。日程詳細と場所は今後調整。

(清水久芳)

学会賞決定のお知らせ

9月28日に評議員会が開催され、田中館賞の受賞者が以下のように決定しました。授賞式は、明年春の日本地球惑星科学連合大会期間中の総会において行なわれます。

記

田中館賞

第160号 中村卓司 会員

論文名： 光学・電波協同観測による大気波動の励起・伝播・砕波の研究

(津田敏隆)

第126回講演会学生発表賞 (オーロラメダル) 報告

講演会における学生発表を3つの分野に分けて審査を行い、学生発表賞を選定致しました。第1分野は地磁気・古地磁気・岩石磁気と地球・惑星内部電磁気の2セッション、第2分野は大気圏・電離圏と惑星圏の2セッション、第3分野は磁気圏、太陽圏、宇宙プラズマ理論・シミュレーション、宇宙天気・宇宙気候の4セッションからなります。特別セッションの「月周回衛星「かぐや」観測によるSTP研究の新展開」は第3分野に組み入れました。審査員は第1分野2名、第2分野4名、第3分野5名の合計11名の方々をお願い致しました。

厳正な審査の結果、本年のSGEPSS学生発表賞オーロラメダルの受賞者は以下の9名の方々に決まりました。

第1分野

佐藤 雅彦さん (東京工業大学) A004-P001 「相転移残留磁化の基本的性質に関する研究」

第2分野

佐藤 隆雄さん (東北大学) B009-15 「Cassini/ISSデータを用いた木星雲粒子の散乱特性」

鈴木 秀彦さん (総研大) B005-15 「昭和基地におけるOH大気光観測 -オーロラとOH回転温度」

平 健登さん (京都大学) B005-P035 「Oersted衛星でみる中低緯度微小磁場擾乱分布の地域・季節・ローカルタイム依存性」

吉岡 和夫さん (東京大学) B009-P005 「極端紫外分光によるイオプラズマトーラスの観測」

第3分野

原田 裕己さん (京都大学) S001-08 「かぐや衛星観測に基づくプラズマシート電子と月面の相互作用の研究」

芝原 光樹さん (京都大学) B006-09 「磁気赤道面付近で観測されたイオンButterfly型ピッチ角分布の解析」

西山 尚典さん (東北大学) B006-26 「れいめい衛星観測に基づくパルセーティングオーロラの降下電子ソース領域と生成メカニズム」

徳永 旭将さん (九州大学) B006-P018 「地上観

測されたPi 2 型地磁気脈動のグローバルな波動特性解析のための周波数領域独立成分分析の応用」

学生発表賞の審査は次の方々によって行われました(敬称略)。講演会期間中に時間と労力を惜しまず審査員として公平かつ公正な選考を下された審査員の方々に心より御礼申し上げます。

第1分野： 綱川 秀夫(東京工業大学)、歌田久司(東京大学地震研究所)

第2分野： 久保田 実(NICT)、堤 雅基(極地研)、三澤浩昭(東北大)、三好勉信(九州大)

第3分野： 羽田 亨(九州大学)、森岡 昭(東北大学)、菊池 崇(名古屋大学)、大村 善治(京都大学)、平原 聖文(東京大学)

受賞者には来年度の春の総会において賞状、オーロラメダル及び副賞が授与される予定です。受賞者以外の発表への講評も含めた、審査員による詳しい講評が分野毎に作成されていますので以下のページをご参照ください。

<http://www.sgepss.org/sgepss/history/students.html>

(学生発表賞事務局： 阿部琢美、塩川和夫)

長谷川・永田賞を授賞して

上出 洋介(名古屋大学名誉教授)



当学会の歴史が記された60周年記念誌が、先日出版されました。この節目の年に、名誉ある長谷川・永田賞をいただき、恐縮の極みです。推薦に当たられた方、審査に携われた方々に深く感謝いたします。授賞の場でcitationをお聞きし、少し誉め過ぎではないかと感じました。

長谷川万吉・永田武両先生は、終戦間もない日本で当学会の設立にご尽力された大先生です。学会の歴史によりますと、永田先生は第1期の会長(当時は、委員長と呼ばれていました)ですが、長谷川先生はそれより前の会長(第0期とも言うのでしょうか)を13年間も務められました。

私にとりまして、長谷川先生はまさに「雲の上の存在」で、直接の交流はありませんが、その穏やかなお人柄を伝え聞いております。一方、永田先生は、「厳しい」先生で、廊下ですれ違ったときでも厳しく叱責を受けるということを先輩から聞いていました。しかし、永田先生の「恐さ」は私の直前の代までのことのようにです。私にとりましては同じ永田研の福島直先生が実質の指導教授でしたから、永田先生の威圧は直接肌では感じていません。むしろ、地下鉄などでお会いしたときは、先生の方から「おはよう」と声をかけてくださるような優しさでした。ひとつ思い出するのは、私が本を出版したとき、筆書きの立派なお手紙をいただき、詳細な感想が書かれていましたが、「それにしても、君はナマイキだ」と終わっていたことです。

福島先生は、世界をリードする地磁気研究の学者でした。最低週1回は夜7時過ぎから、私が研究結果を持参して先生と議論をしました。永田先生とは異なる「柔らかい」先生で、見習うことが沢山ありました。それだけに、先生の「地磁気データからは、等価電離層電流以上のことは語ることはできない」は説得力がありました。とくに、私が大学院に入ったころは、ちょうど人工衛星の観測データが出始め、プラズマシートやローブの性質、惑星間空間磁場が南向きになるとサブストームが起きることの発見など、興奮する新しい情報もたらされ始めたときでしたので、いくら地磁気データからは等価電離層電流系しか確実に引き出せないにしても、せめて論文のDiscussionで、太陽風の状態や磁気圏尾電流の切断などを「引き合い」に出して議論したいのが

若い学生の心境でしたので、それらの推測を書いた論文のドラフトが、赤で完全に消されて戻ってきたのを見ると、悔しさに涙が出たことさえあります。

しかし、この「いらいら」を何年も貯めていたことが、今回の授賞の対象になったKRM法という一種の逆計算法の開発につながりました。また、この「いらいら」を心中に収めたまま渡米したため、人工衛星やレーダーからの直接データに、強い動機を持ってすぐ飛びつくことができたのだと思います。当時はこれらのデータはアメリカでも新しいものでしたので、アメリカ人と同じスタートラインに立って研究するという幸運に恵まれたのです。そのころ競争した仲間は、その後の人生の貴重な財産になりました。

渡米の直前には、当時東大宇宙航空研究所におられた西田先生が NASA から持って来られた太陽風のデータを見て興奮したものです。私の JGR 第1号論文は、このデータとサブストームの関係に関する発見についてでした。

私の研究手法は、観測や実験ではなく、かといって純理論でもありません。ひょっとして我々の分野に独特なのかも知れませんが、データ解析という手法です。地磁気など万国共通のデータも頻繁に使いますが、他の研究者が苦勞して獲ったデータをもらい、ユニークな方法で意味のあるものを発見するという事です。ですから、今回の授賞には多くの方々のご理解、ご協力があるということを決して忘れてはいけません。AGUなどで講演を聞いて、「そのデータがぜひ欲しい」とアプローチしたのですが、時には論文を読んで電話をしたこともあります。何度も躊躇しながら電話をしたのは、あの L. A. Frank に対してでした。今でこそ、人工衛星で「上から」オーロラの大規模な変動が刻々と撮影できますが、12分ごとに Dynamics Explorer 1 (DE 1) が初めてオーロラブレイクアップの連続写真を撮ったことには、感動さえおぼえたものです。勇気を出して、「DE 1からのオーロラ分布と KRM から計算した電場/電流を比較したい」と電話をしました。答えは、即 OK で、急ぎアイオワ大学へ飛びました。

私の歳になりますと、この分野の今後の発展性が気になります。研究成果やプロジェクトの評価に携わることもあります。生命や天文、化学、工学に比して、太陽地球系科学の新味と迫力で「負けているのでは…」と感ずることがありま

す。若い方々の努力に期待すること大です。

特別表彰を受賞して

夏原信義 (夏原技研)



この度、本学会の第一回の特別表彰を頂き、大変光栄に存じます。

昭和41年4月に大阪大学基礎工学部川井研究室に文部技官として配属されたことにより、現在の仕事への道筋が決まってしまったように思えます。最初の2年間は百万気圧発生を目指した超高压発生装置の開発が主業務で、その装置の心臓部にあたる8分割球体の初期の開発・製作に参加しました。そこで物作りの大切さと工作技術を体得できたことは大変に幸運でした。

その後、同研究室のもう一つの研究分野であった古地磁気・考古地磁気の仕事に従事する機会を得ることになりました。当時、助手の広岡公夫先生(現・富山大学名誉教授)には試料整形、採取、測定方法など古地磁気全般についてご指導して頂きました。

故川井直人先生には無定位磁力計の製作方法や石英の微細加工や堆積物の測定など多くのことを教えて頂きました。当時院生の中島正志さん(現・福井大学名誉教授)や鳥居雅之さん(現・岡山理科大学教授)と共に昼夜を問わず測定や装置作りをしたことが大変勉強になりました。

昭和54年7月に川井先生が病のために急逝されました。私にとっては一番つらい時期でした。それから研究室の衰退が始まり昭和58年に大阪大学を退職して民間企業に一時就職し、その翌年に同僚3人でスピナー磁力計を作るために起業しました。この時、友人がビルの屋上にある8畳ほどのプレハブを無償で貸してくれたこと、技術面では

当時、大阪府立大学助手の渋谷秀敏さん（現・熊本大学教授）がサポートしてくれたこと、販売は（株）太平商事さんが福井大学（中島正志教授）から仕事を引き受けてくれたこと、資金は退職金と故川井登思子夫人の援助や家族の支援があったことが今日につながっているのだと感謝しています。最初スピナー磁力計の製作には、何もかもが初めての経験で、その年の年末大晦日まで調整をするなど大変に苦労しましたが、何とかその年度末までに納品することが出来ました。

それからはバブルと言う幸運もあり、超高压の研究者の方々からのご支援やご依頼を頂き大型プレスの製作や超高压発生装置の製作をさせて頂き、古地磁気、岩石磁気や考古地磁気研究者の多くの方々からはスピナー磁力計を始め交流消磁装置、熱消磁装置、自動スピナー磁力計等々を数多く作らせて頂きました。諸先生方には、私共の技術が追いつかずご迷惑をおかけしたことも多々有ったかと存じます。この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

今回の表彰を受けられましたのも、良き職場と多くの良き師や友に恵まれ、仕事を続けられたおかげと感謝いたしております。体調とも相談しながら、少しでも本学会に寄与できますように精進していきたいと思っています。

そして今回、ご推薦して下さいました先生方に心より感謝いたします。

悼辞—故若井登会員—

恩藤 忠典

本学会の正会員だった元電波研究所長の若井登氏は、平成21年4月21日に間質性肺炎により享年82歳で他界されました。心から御冥福をお祈り致します。

同氏の御経歴を簡単に紹介し、生前の御活躍を偲びたいと思います。

若井登氏は昭和2年(1927)8月25日に東京でお生まれになり、旧制府立葛飾中学校(現日本橋高校)、旧制浦和高等学校(現埼玉大学)、東京大学工学部電気工学科を御卒業になり、1950年3月31日電気通信省電波庁電波部(1952年電波研究所に組織変更)に入られ、電波研究所の企画課、平磯支所超高層研究室長、平磯支所長、電波部長、1982年電波研究所長等

を歴任されて、1986年に御退官。同年8月に東海大学開発技術研究所教授に着任、その後、日立国際電気(株)顧問(1997年7月22日—2001年7月21日)、1998年勲三等旭日中綬章の荣誉に浴されました。

同会員は1957—60年に、南極昭和基地の電離層観測に参加されています。又、1965—66年に米国コロラド州ボルダー市の米国商務省中央電波研究所で、同所のJonesとGallet博士が作成した、電離層の電波観測データから電子密度の高度分布を求める計算機プログラムを用いて、世界で初めて電離層F層とE層の谷間の電子密度の高度分布を、地上から鉛直に打ち上げた電波の電離層F層とE層からの反射波トレースを解析して求める研究を行い、1969年5月に第46号田中館賞「夜間電離層E領域の構造に関する研究」を受賞されています。又、1972年に「夜間の電離層E層とその電波伝搬への影響に関する研究」により、工学博士を取得されています。

特に同氏は、電離層と電波に関する知識の普及に努力され、「電波ってなあに」という一般市民向けの「でんぱ101Q & A」方式の365頁の易しい著書を、(財)電気通信振興会から1987年に出版されました。又、電波研究所の所長時代に、電波研究所編集の形で1986年に電気通信振興会から出版された290頁の「日本中心の短波伝搬曲線集」は、この方面の貴重な著書となっています。

若井さんは、退職後は主に「明治時代以後の日本の電気通信の研究と進歩の調査」に、専念されました。

当学会の会報、第197号(2008年10月1日)の6～8頁の「地磁気事始め」にある、工部大学(後の東京大学)卒の志田林三郎先生が求めた光速の記事(表1)は、若井さんの遺稿となりました(SGEPSS 60周年記念学会史)。

研究所時代の昼休みに、硬式テニスで対戦した若井さんの返球は、ロブが全くなく、ドライブのかかったクロスの強烈なものでした。

註釈 我国の電波関係の試験研究小史

我国の電波の試験研究は、明治29年に通信省電気試験所で開始された。大正4年に設置された電気試験所平磯出張所は、大正11年に文部省学術研究会議内の電波研究委員会に所属していたが、太平洋戦争後に電波伝搬と電力の2部門の電気試験所に統合された。

他方、昭和17年(1942)に、電波物理研究所が文部

省に設置された。1948年6月に電波物理研究所は電気試験所へ統合され、1948年8月に電気試験所の電気通信部門は、通信省電気通信研究所へ改組された。

1949年6月に通信省が、郵政省と電気通信省に分割され、電波庁は電気通信省の外局として電波行政を担当し、電気通信研究所は電気通信省に所属していた。

他方、文部省の旧電波物理研究グループを継承する電気通信研究所電波部は、1949年11月に電波庁電波部となったが、1950年6月1日の電波監理委員会設置法の施行により、旧電波物理研究グループは、電波監理委員会に付属する電波観測所となった。この電波観測所は、東京国分寺の中央電波観測所と、稚内、秋田、平磯、犬吠、山川の5箇所の地方観測所から構成された。

1950年6月1日に電波庁は廃止され、総理府に電波監理担当の電波監理委員会が設置された。

1952(昭和27)年の講和条約の発効に伴い、電波監理委員会は郵政省の内局の電波監理局となり、1952年8月1日に郵政省電波研究所が発足した。

情報通信研究機構(旧電波研究所、通信総合研究所)では、この日を記念して、毎年8月1日に研究施設の一般公開をしている。

参考文献 「電波研究所二十年史」 郵政省電波研究所、電波研究所二十年史編集委員会、研文社、昭和50年3月25日発行。

会計報告

第126回総会において、平成20年度本会計・特別会計決算と平成22年度本会計予算案が承認されましたので、以下の通りご報告します。(詳細は決算書と予算書の表をご覧ください)

平成20年度決算について

平成21年6月30日に会計監査会を実施し、監査委員(品川裕之会員、橋本武志会員)による会計監査を受けました。監査結果については、第126回総会において会計処理が適正であったことが報告されております。

本会計の会費収入について、納入率は単年度計算では全体平均83.1%、前年度以前分納入を含めた納入率では94.3%となりました。海外会員の納入率が低いのですが、改善のために今年度の請求書には銀行振込みに加えてクレジットカードによ

る支払いが可能なことを通知致しました。大会参加費収入は予算額を上回っています。収入全体としては予算額を72万円ほど上回りました。

支出について、管理費は予算額を12万円程上回りましたが、これは印刷費や会費振込手数料の増加に因っています。事業費のうちで男女共同参画経費は予算額に比べ少ないですが、この活動として行ったアンケートの印刷費は管理費の印刷費に含まれています。会報発送費はJpGUの会報JGLの発送費増等により予定額を約10万円超えています。基金交流事業費は20年度の申請者が少なく本会計からは1件のみ支出をいたしました。60周年記念事業費は20年度には使用しないこととなりました。全体としては支出額が予算を約35万円下回ったこととなります。結果的に本会計の繰越金は約107万円増えることとなりました。

特別会計では、西田国際学术交流基金から2件の派遣を行いました。平成19年度からEPS誌の出版助成関係を特別会計として独立させており、出版助成金は約1160万円で組版印刷製本費、欧文校閲費として支出致しました。この他の特別会計については、各学会賞の賞状筆耕やメダル刻印等に支出を行いました。

平成22年度予算について

22年度予算については、21年度の予算額を参照しつつ20年度決算額を参照する形で作成致しました。会費収入については概ね95%程度の納入率を仮定して算出しています。事業費の中で秋学会投稿システムは来年度大幅に変更されますが、料金の増減が不明なため過去の実績に近い金額で計上いたしました。

(会計担当運営委員 阿部琢美・村田功)

中間圏・熱圏・電離圏研究会 (略称：MTI研究会)

活動報告

中間圏・熱圏・電離圏研究は、超高層物理学、地球電磁気学、気象学、電波工学、あるいは大気化学と様々な側面からのアプローチが必要不可欠であることから、様々なバックグラウンドを持つ研究者が相互に交流し、協力し合う場を作り、よ

り効率的・効果的な研究活動に繋げることを目的にSGEPSS 分科会「中間圏・熱圏・電離圏研究会」(MTI 研究会)が発足しました。

MTI 研究会では、学会等開催時に会合を持ち、国内外において現在進行中のプロジェクト、研究計画などについて情報交換を行っています。また、分科会参加者により同分野の研究集会等の企画・運営がなされているほか、メーリングリスト上での情報交換が活発に行われています。

○第16回MTI研究会集会

場所： 幕張メッセ国際会議場 201B

日時： 平成21年(2009年)5月19日(火)

12:30~13:30

報告事項・話題提供など(以下、敬称略)

「本日の懇親会の御案内」

「MTI研究集会の御案内」久保田 実, 藤原 均, 斉藤昭則, 大塚雄一, 坂野井和代, 細川敬祐

「ISS-IMAPの状況とスケジュール」 斉藤昭則

「IRI2009の御案内」 渡部重十

「EISCAT次期計画~EISCAT 3D projectの紹介~」野澤悟徳, 宮岡 宏, 小川泰信, 大山伸一 郎, 藤井良一

「SuperDARN北海道-陸別HFレーダーの将来計画」 西谷 望

「2月に昭和基地で夜光雲が観測されたとき SuperDARN の観測」 細川敬祐

「MTI ハンドブックについて」 細川敬祐, MTI ハンドブック編集グループ

「PANSYの現状報告」 堤 雅基

「積分球の更新に向けて」 江尻 省

「MTI分科会 次期運営体制について」 藤原 均

同日の19:30より懇親会を開催し約40名の参加がありました。

○第17回MTI研究会集会

場所： 金沢大学 角間キャンパス B会場

日時： 平成21年(2009年)9月28日(月)

17:45~19:35

報告事項・話題提供など(以下、敬称略)

「はじめに(晩の懇親会の御案内など)」

藤原 均

「稚内と陸別のレーダーで観測された2009年の

夏季中間圏エコー」 小川忠彦

「CAWSES-II(2009-2013)の紹介」 塩川和夫

「NICT電離圏観測データ公開サイトのリニューアルについて」 津川卓也・他

「極地研究所で開催予定のMTI関連研究集会のお知らせ」 堤 雅基・他

「レーダー・ワークショップのお知らせ」

津田敏隆(代読 藤原)

「MTI研究集会のお知らせ」 MTI分科会世話人

「学会時のMTIセッションについて」

MTI分科会世話人, MTI関連セッション
コン ビーナ

「MTI分科会世話人の改選について」 MTI分科会世話人

本会合にて世話人より次期(第5期)世話人の選出に関する提案が行われ、参加者の同意が得られました。

同日の19:30より、懇親会が開催され、約40名の参加がありました。

*分科会会合に参加できなかった方々に配慮し、前例に習ってメーリングリストにて提案内容(新たな世話人の追加など)が示され、承認されました。2009年11月より第5期世話人による分科会の運営がスタートしました。第5期世話人は以下の通りです。久保田実(世話人代表, 情報通信研究機構)、江尻省(国立極地研究所)、大塚雄一(名古屋大学STEL)、大山伸一郎(名古屋大学STEL)、斉藤昭則(京都大学・理)、坂野井和代(駒澤大学)、Huixin Liu(京都大学RISH)、細川敬祐(電気通信大学)

○研究集会

本分科会に関連する多数の研究集会が開催されました。特に、名古屋大学太陽地球環境研究所・情報通信研究機構 研究集会「中間圏・熱圏・電離圏(MTI)研究会」は分科会参加者の多くが参加するもので、1998年以降、同様の研究集会が開催されています。本年は、名古屋大学太陽地球環境研究所研究集会「地球科学におけるデータ可視化へのGeobrowserの活用に関する研究集会」と連続して11月30日(月)-12月1日(火)に京都教育文化センターにて開催されました。

○メーリングリスト・webページの活用

情報通信研究機構(NICT)グループの協力のもと、研究者間の情報交換を目的としたメーリングリストの運用が2001年10月24日より開始され現在に至っています。

- * MTI関連キャンペーン観測、分科会関係者が主催する研究会の連絡
- * 研究員等の公募情報
- * 共同利用案内

などのアナウンス等、有効に利用されています。

また、MTI研究会の活動・関連情報(研究集会など)は、以下のホームページにて公開されています。

<http://www2.nict.go.jp/y/y223/rpp/MTI/>
メーリングリストへの参加については上記ホームページをご覧ください。

○MTIハンドブック

若手を中心としたMTI研究集会のサイエンスセッション企画グループが主体となって「MTIハンドブック」というものを作成・公開しています。MTIハンドブックは、大学院生・若手研究者がMTI領域の研究を行う際の一助となるような日本語資料を作成する目的で、中間圏・熱圏・電離圏(MTI)研究会で行われた口頭講演を第三者がレビューし、一般に公開しているものです。原則的には、講演者以外のポスドクを主体とした若手研究者がレビューを担当し、講演時のスライドや音声資料をもとに読み切りの資料として編集しています。以下のURLにアクセスしていただくと過去4年分のMTI研究集会の講演に関する資料をPDF形式でダウンロードすることができます。

http://www2.nict.go.jp/y/y223/rpp/MTI/MTI_symposium/mti-handbook/

なお、観測システム・モデル紹介に関するポスター講演については、MTI分科会の内部資料という位置づけのため、ダウンロードしたPDFファイルを開覧する際にパスワードの入力が必要となります。パスワードの照会、その他、ご意見・ご要望があれば mti-hb@viola.nict.go.jp までお知らせください。

MTIハンドブック編集グループ (mti-hb@viola.nict.go.jp) 江尻省, 大山伸一郎, 小川泰信, 栗原純一, 斎藤享, 坂野井和

代, 陣英克, 鈴木臣, 津川卓也, 富川喜弘, Huixin Liu, 細川敬祐, 横山竜宏
(藤原均, 久保田実, 斉藤昭則, 大塚雄一, 坂野井和代, 細川敬祐, 江尻省, 大山伸一郎, Huixin Liu)

データ問題検討分科会 活動報告

データ問題検討分科会は、分野を横断し共通するデータに関する問題について、解決の方策を検討する場として平成17年2月26日に設立されました。

http://www2.nict.go.jp/y/y223/rpp/Sgepss_data/index.html

最近の活動報告を以下に挙げます。

平成21年第1回会合

日時：平成21年5月17日12:30-13:30

場所：日本地球惑星科学連合大会会場202号室

議題：今回のデータ問題分科会では、IGY50シンポジウム後の各機関におけるeGY的な取り組みについて検討を行った。IGY50シンポジウムは国際地球年50周年を記念して、その後継であるeGY、IPY、IYPE、IHY等が中心となり2008年11月に開催された。そのメインテーマの一つとして地球科学とICTとの融合が掲げられ、多くの検討がなされたほか、TSUKUBA宣言としてまとめられた。今回はそのシンポジウムから半年が過ぎ、実際に各機関の中でどのような取り組みがなされたかを検討した。本会合は日本学術会議eGY小委員会の拡大会合と合同で行った。

平成21年第2回会合

日時：平成21年9月28日12:10-13:10

場所：金沢大学D会場

議題：今回のデータ問題分科会では、現在進められている大学間連携プロジェクト「超高層大気長期変動の全球地上ネットワーク観測・研究」についての紹介を京都大学生存圏研究所の林寛生さんから頂いた。本プロジェクトでは、参加研究機関が所有する観測データのメタ情報をデータベース化して共有するシステムを構築することで、多種多様な観測データを利用した総合解析を促進し、超高層大気長期変動のメカニズム解明を目指す。開発初年度にあたる現在は、特にメタ情報のフォーマット決定とメタ情報データベースシステ

ムのプロトタイプ作成を優先して進めており、本分科会で現状の開発状況について説明があった。続いて、本件のより広い枠組みでの検討を進める議論が活発になされた。

(石井 守)

古地磁気・岩石磁気研究会 活動報告

今年も研究会の活動として以下の会合を行ったのでここに報告する。

2009年古地磁気・岩石磁気夏の学校

日時：平成21年9月13～15日

場所：国立信州高遠青少年自然の家

今年の夏の学校には42名(教員・研究者18名(うち外国人研究者1名)、学生24名)の方が参加され、13日午後から15日午前まで計15件の講演が行われた。内容は、古地磁気・岩石磁気・環境磁気・惑星磁場・テクトニクス・IODP・磁気異常などに関する最新の研究結果、レビュー、今後の研究計画の紹介等であった。ほとんどがSGEPSSを活躍の場とされているベテラン研究者(ポスドクを含む)の発表だったが、学生による発表も2件あった。会場で交わされた活発な議論や鋭い指摘は発表した学生のみならず、参加した学生諸氏にとっても大きな経験となったであろう。夕食後は学生を含めほとんどすべての参加者が持ち寄ったポスターを前に自由に議論を行い、親睦を深めた。なお詳細なプログラム等は<http://science.shinshu-u.ac.jp/~geol/saito/labo/09magne/index.html>に掲載してある。

14日午後は会場を離れ、会場の南に位置する高遠町の周辺に露出する中央構造線と三波川・領家変成帯を観察する巡検を行った。当日は天気にも恵まれ、露頭の各所で議論が交わされ、何人かの方を核にした野外教室が自然と形成されていた。近年の夏の学校では、この様な巡検が計画されていなかったようなのであえて計画したのだが、概ね好評であったのではないかと推察する。次回(2010年)の開催は岡山大学の宇野康司さんの担当で行われることが決まった。

個人的な感想になるが、私はこの様な会合のお世話をするのは初めてだったのだが、非常に大変

であることが良くわかった。本会報の201号で河野長先生がこの夏の学校についてコメントされているが、それでも私はこの会合の意義は大きいと感じている。私自身、名前しか知らない、あるいは名前も知らない大先生と議論をし、懇親を深めることができたのは、この夏の学校であった。これまで継続されてきた先人たちに対する敬意を深くするとともに、今後の更なる発展に微力ながら貢献できればと思う。最後に、巡検地について案内していただいた信州大学の森清壽郎教授、巡検に協力して下さった愛知教育大学の星博幸氏、また夏の学校期間中手助けして下さった参加者の皆様に対して、この場を借りて深く御礼申し上げます。



(2009年夏の学校幹事 齋藤武士)

シミュレーション分科会 活動報告

当分科会は、SGEPSSおよび周辺研究諸分野の研究者と“数値シミュレーション”を共通のキーワードとして交流を図る事を活動目的としています。平成21年度は以下の研究集会の共催と会合を行いました。

○太陽地球惑星系科学モデリング・シミュレーション関連合同研究集会

日時：2009年8月4日-7日

場所：九州大学西新プラザ及び九州大学山の家・九州地区国立大学九重共同研修所

太陽地球惑星系科学モデリング・シミュレーションに関連した4つの研究集会NICT計算機シ

ミュレーション研究会」「H21年度名古屋大学太陽地球環境研究所共同研究集会・太陽地球惑星系科学シミュレーション技法勉強会」「H21年度名古屋大学太陽地球環境研究所共同研究集会・太陽地球惑星系統合型モデル・シミュレータ構築に向けた研究集会」「JST/CREST「リアルタイム宇宙天気シミュレーションの研究」チーム成果発表会」が、情報通信研究機構、名古屋大学太陽地球環境研究所、JST/CREST「リアルタイム宇宙天気シミュレーションの研究」、東北大学Global COE「変動地球惑星学の統合教育研究拠点」、九州大学宇宙環境研究センターとの共催で合同・連続開催され、太陽から地球・惑星圏におけるプラズマ・大気現象のモデリング・シミュレーションの現状から、シミュレーション技術まで幅広い内容の招待講演・研究成果報告がなされました。また、数値科学の専門家の招待講演を通して次世代シミュレーションについての活発な議論がなされました。

○第4回シミュレーション分科会

日時：2009年9月30日

場所：金沢大学（SGEPSS秋学会会場）

30名の関連分野の研究者に参加いただき、今年度に開催した研究集会の開催報告、国内各機関におけるシミュレーション研究の現状報告、今年度予定されている研究集会情報の紹介がなされました。また、2010年の連合大会で開催予定の「プラズマ宇宙物理3学会合同セッション」の紹介があり、意見交換がなされました。

○「STEシミュレーション研究会：粒子加速と波動粒子相互作用」および「宇宙プラズマ波動研究会」

日時：2009年10月28日-30日

場所：仙台市戦災復興記念館

この研究集会は名古屋大学太陽地球環境研究所、東北大学Global COE「変動地球惑星学の統合教育研究拠点」ならびにSGEPSS波動分科会との共催で行われました。太陽地球系科学・プラズマ科学に関するシミュレーション全般、惑星大気および電離圏プラズマ中での波動現象、衝撃波における波動粒子相互作用などの最新の研究成果が報告

されると共に、粒子加速過程及び関連する波動粒子相互作用についてのシミュレーション研究の進展と今後の展望についての議論がなされました。また、波動研究とシミュレーション研究とのコラボレーションについての活発な意見交換が行われました。

分科会活動については<http://center.stelab.nagoya-u.ac.jp/simulation/>もご参照下さい。

(中村 琢磨)

内部磁気圏分科会活動報告

内部磁気圏分科会は、内部磁気圏研究に関連する諸分野との交流、共同研究やキャンペーン観測の促進、新しい内部磁気圏探査ミッションの実現などを通して内部磁気圏研究を推進することを目的としている。平成21年度は、分科会として以下の2回の会合を行った。

第21回内部磁気圏分科会会合

日時：平成21年5月20日(水)

場所：幕張メッセ(日本地球惑星科学連合大会・201B会場)

この会合では、内部磁気圏探査衛星ミッション(ERG (Energization and Radiation in Geospace))に関して、前年9月に宇宙科学研究本部に提出された提案書のレビューの状況と今後の予定、海外の関連する衛星群の状況などについて情報交換を行った。また、名古屋大学太陽地球環境研究所によるERGサイエンスセンターの準備の状況、中緯度SuperDARNネットワーク将来計画の最新状況、SCOSTEPによる国際プログラムCAWSES-IIの紹介なども行われた。

第22回内部磁気圏分科会会合

日時：平成21年9月30日(水)

場所：金沢大学（SGEPSS秋学会・C会場）

この会合では、この前の月に小型科学衛星2号機のミッション候補として宇宙科学研究本部に採用されたERG衛星の検討状況や、今後の研究体制の構築について議論を行った。また、ERGサイエンスセンターに向けて整備されつつある地上データベースのQLプロットツールの紹介なども行われた。

内部磁気圏分科会ホームページアドレス：
<http://www2.nict.go.jp/y/y223/IM/index.html>
(小野高幸、小原隆博、塩川和夫、関華奈子、長妻努、三好由純)

2009年秋アウトリーチ イベント 「宇宙を探る電波のチカラ ～ ビビッとスゴイ電波の不思議 ～」報告

2009年秋学会の前日(9/26 土曜日)の午後に今年で6回目となる一般市民向けアウトリーチイベントを開催しました。兼六園や21世紀美術館にほど近く、金沢市の観光文教地区に位置する金沢歌劇座に参加者104名を集めて行われました。

今回のテーマは「電波」でした。また例年通り、SGEPSSが網羅する研究範囲の啓蒙にも力を入れています。(1)トークショー(2)実験(3)展示(4)『おしえて☆はかせ』コーナー(5)『はかせへの道』コーナー、の5つのパートがあり、それぞれの内容は以下のようなものでした。

(1)『トークショー』では、まず徳丸宗利会員(名古屋大学)による「電波の“またたき”で宇宙の風を測る」というタイトルで電波を用いた宇宙空間・太陽の研究の最前線をお話いただきました。その後、南極昭和基地と会場を衛星通信+インターネットで接続し、第50次南極観測隊として越冬されている門倉昭会員(国立極地研究所)と香川博之先生(金沢大学)と会場の間でトークショーをしました。南極における観測の説明のほか、オゾンホールや温暖化といった最近社会で関心を持たれている問題についてもクイズ、参加者・高校生の質問に答える形で報告されました。

(2)『実験』では電波を身近に実感できるゲルマニウムラジオの作成を参加者の皆様に体験していただく企画をしました。この企画にはアウトリーチ部会メンバーだけでなく、地元の石川県立金沢泉丘高校の物理部・化学部の生徒さん4名も企画段階から参加して頂きました。SGEPSSとして

具体的に高校生と協働することは減多になく今後の教育啓蒙活動に参考になるかと考えております。4名の高校生の皆様のご指導および当日のご引率いただいた顧問の先生方に御礼申し上げます。

(3)『展示』ではSGEPSS会員の所属研究機関からいくつかの展示をお借り展示し、参加者の皆様に最先端研究の一端に触れていただきました。展示したものは、情報通信研究機構からタイルドディスプレイを用いた宇宙天気シミュレーション表示と偏光メガネを用いた太陽の3D動画、宇宙航空研究開発機構から金星探査機 Planet-C と水星磁気圏探査機 MMO (Bepi Colombo 計画)の模型、海洋研究開発機構から地球シミュレータES1&2の模型、山梨県立科学館からパンデグラフ、京都大学からデジタル4次元地球儀ダジック・アースでした。

(4)『おしえて☆はかせ』コーナーは毎年のイベントでおなじみの企画です。

SGEPSSがカバーする宇宙地球科学の様々な分野について、一線の研究者が参加者の皆さんの素朴な疑問・質問に丁寧に答えます。また、各“はかせ”は黙って待っているだけではなく、皆さまからの興味を引こうとポスターや展示物に趣向を凝らして待ち構えます。

今年の“はかせ”は「オーロラはかせ」、「南極はかせ」、「隕石はかせ」、「地球はかせ」、「流星はかせ」、「雷はかせ」、「電波はかせ」、「銀河・惑星電波はかせ」でした。

(5)『はかせへの道』では、宇宙科学、地球科学方面への進学を目指す高校生からの進学相談を受けるコーナーです。SGEPSSとして(というより地球惑星科学全体としても)興味を持っている高校生がいることが業界全体の将来に重要と考えての企画です。

今年のイベントでは高校生を主なターゲットとして地元高校生を意識したイベント作成にこだわりました。地元高校をはじめ近隣の小中学校にもチラシを撒く等の広報を力を入れました。しかし結果的には高校生の参加者はさほど多くなく、チラシが高校生の目に触れるところまで行き渡っていたか、チラシが有効な広報手段だったか、日程・時間はどうだったか(近隣高校が学校の定期試

験を控えていたことなど)、などの問題点・反省点を抱えております。一方で、参加した高校生の反応はすこぶる良く(一部は開場から終了時刻までいてくださいました)、イベント自体の方向性は間違っていないものと考えております。上記のような反省点を糧にしつつ来年のイベントをコンパクトかつ迅速に準備する予定です。

SGEPSSが学会としてこのようなイベントを開くことの重要性は明白です。研究を支えてくれる納税者の皆さまへの説明責任を果たす一環としてのみならず、将来の研究者を目指す若者を発掘すること(小中高生、とくに進学を近く迎える高校生に学問分野を知っていただくこと)のためにこのようなイベントは必要不可欠であると考えて遂行しております。ご支援ご協力いただいている各機関・会員の皆さまに御礼を申し上げますとともに、今後のお力添えをよろしく願いいたします。

秋学会LOCの笠原禎也会員、尾崎光紀会員(金沢大学)、東亮一会員(石川工業高専)に事前から当日まで大変お世話になりました。本イベントは科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」2152015を受けて行われました。金沢大学、石川県教育委員会、金沢市教育委員会のご後援をいただきました。国立極地研究所、第50次南極観測隊、および展示物をお貸し下さった各機関のご協力をいただきました。広報活動について金沢大学広報戦略室ならびに金沢コンベンションビューローのアドバイスを頂きました。厚く御礼を申し上げます。

2009年秋学会記者発表会報告

秋学会開催の前日の9月26日に、金沢歌劇座の第4会議室において記者発表を行い、本大会に投稿された以下の4つの研究テーマ(論文6編)が、著者、共著者によって紹介されました。記者発表にご協力いただいた論文著者は、7月22日の日食観測に関連した論文で家森俊彦会員と湯元清文会員(藤田悠さんの代読)、地磁気に関連する液体金属の論文で柳澤孝寿さん、地震の地磁気に与える変動に関する論文で大久保寛さん、「かぐや」衛星の観測成果に関する論文で齋藤義文会員と西野真木会員でした。

発表には在金沢の大手新聞社やテレビ局の記者らにお集りいただき、一部の研究については、記事として新聞に掲載されたり、テレビのニュース番組で取り上げられたりしました。本企画の実施に当たっては、アウトリーチ部会の深沢圭一郎会

員、篠原育会員にご尽力いただきました。

(畠山 唯達)

男女共同参画提言WG報告

1. 最近の男女共同参画学協会連絡会の活動より
・10/07(水)に東京工業大学にて第7回学協会連絡会シンポジウム「持続可能社会と男女共同参画」が行われました。午前中の分科会にて、若手向け「ポストク・任期制雇用について」をテーマに4名から話題提供とパネルディスカッションを行い、幅広い年齢層から活発な質疑応答がなされました。午後の部では、産業界から「持続可能社会に向けての女性研究者・技術者への期待」について4件の講演があり、産学官連携して男女共同参画のあり方が議論され、盛況のうちに第8期高分子学会に引き継がれました。

・11/13には、第7期の中にまとめた提言について、賛同する学会名を連記して、内閣府に提出しました。これは、政権交代による事業見直しの対象に、女性研究者支援事業も該当したため、支援の継続を緊急に訴える手段として取られた措置です。第二回大規模アンケートの結果を踏まえながら「科学技術分野での男女共同参画の推進に向けての要望提言」と「ポストク等任期付職のライフイベント、及び将来設計支援に関する要望提言」の二本立てで提出しました。本学会のWGでは、提言内容に賛同する箇所はあるとはいえ、細部にわたる議論がさらに必要であり、ポストク問題については修正案を提案していることから、第8期に継続的に審議を続け、ポストク問題の課題に取り組みたいと考えています。

・11/17に行われた行政刷新会議の事業仕分けでは、「女性研究者支援」が予算1/3削減、「若手研究者育成」も整理、削減という結果となり、SGEPSSでも運営委員を中心に支援策の継続を求めるコメントを提出しました。

2. 地球惑星科学連合の男女共同参画活動の動き
・地球惑星科学連合の男女共同参画委員会では、坂野井和代会員が副委員長を努め、キャリア支援委員会との連携をはかり、主に現在はポ

ストクの問題について 議論・検討を進めています。また、SGEPSSと共に学協会 連絡会での活動を行っています。連合では、11月に提出した提言(上述)に対して、修正案を提案し、学協会連絡会として一つのまとまった要望案にまとめ、12月中の提出を目指しています。第8期では、ポストク 問題に対するワーキンググループを立ち上げ、明確なメッセージを出したいと考えています。

3. 秋学会での保育室について

・今年9月の金沢大学での秋学会でも、LOCのご協力により、2部屋(託児用および休憩室)を保育室として確保することができ、2家族4名の利用がありました。関係者の皆さまにはご協力くださりありがとうございました。

(木戸 ゆかり、坂野井 和代、長妻 努)

名古屋大学 太陽地球環境研究所教員公募

公募人員：教授 1名

所属：電磁気圏環境部門

公募分野：電磁気圏環境部門では、欧州非干渉散乱(EISCAT)レーダーをはじめとする各種のレーダー装置や光学・電磁場観測装置を用いた多点・拠点による地上観測を中心とし、人工衛星データやモデル計算も組み合わせ、熱圏・電離圏・磁気圏環境の研究を行っています。今回の公募では、地上観測機器や人工衛星による新しい観測的手法に基づいて、太陽地球系科学における電磁気圏環境に関する研究を広く発展させ、当該研究分野において先導的な役割を果たして頂ける方を求めます。また、大学院理学研究科の協力講座として、学生の教育に熱意を持つとともに、全国共同利用研究所の任務を十分に理解し、共同研究・共同利用の促進に積極的に取り組んで頂ける方を希望します。

着任時期：決定次第、できるだけ早い時期

応募資格：博士の学位を有すること

提出書類：(1)履歴書(2)研究歴(3)業績リスト(主要論文3編までのコピーを添付) (4)研究

計画書(5)2名の方からの推薦書、又は、本人について意見を述べられる方2名の氏名と連絡先を記入した書面。

応募書類は原則返却しません。なお、提出いただいた書類は本選考のためだけに使用し、責任を持って処分させていただきます。予めご了承願います。

書類送付先：〒464-8601

愛知県名古屋市千種区不老町 F3-3(250)

名古屋大学研究所総務課 第一庶務掛

封書の表に「教員公募書類在中」と朱書し、簡易書留にて郵送願います。

公募締切：平成22年1月29日(金) (必着)

問合せ先：

(1)提出書類について

〒464-8601

愛知県名古屋市千種区不老町 F3-3(250)

名古屋大学研究所総務課 第一庶務掛

TEL：052-747-6303 FAX：052-747-6313

(2)研究内容等について

〒464-8601

愛知県名古屋市千種区不老町 F3-3(250)

名古屋大学太陽地球環境研究所 教授

塩川和夫

TEL：052-747-6419 FAX：052-747-6323

選考：名古屋大学太陽地球環境研究所人事選考委員会の選考に基づき、同運営協議会の意見を求めて同教授会で決定します。ただし、該当者がいない場合は決定を保留します。本研究所の教員の公募に関連して提出された個人情報については、選考の目的に限って利用し、選考終了後は、選考を通過した方の情報を除き、全ての個人情報を責任をもって破棄いたします。また、本研究所では、業績(研究業績、教育業績、社会的貢献等)の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用します。

山田科学振興財団2010年度研究援助の推薦について

財団法人 山田科学振興財団から、2010年度研究援助候補の推薦依頼が来ております。この助成

を受けるには、学会からの推薦が必要です。本学会からは2件まで推薦することができます。推薦を希望される方は、2010年1月31日までに総務にご連絡ください。運営委員会において選考いたします。

記

書類：(財)山田科学振興財団所定の様式
提出方法：運営委員総務・山本衛
(yamamoto@rish.kyoto-u.ac.jp)あて電子メール
(参考)山田科学振興財団HP <http://www.yamadazaidan.jp/>

(山本衛)

「スプリング・サイエンス キャンプ2010」のご案内

財団法人日本科学技術振興財団サイエンスキャンプ事務局より表記ご案内を頂きました。本キャンプは対象が高校生等ですが、一人でも多くの方に応募の機会を提供したく、また、高校生等へ御紹介いただく機会のある教諭等にも知っていただく為、掲載を依頼されたものです。

平成22年3月に、文部科学省の科学技術関係人材総合プランの施策のひとつ「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」の一環として、大学、公的研究機関、民間企業19会場の協力を得て、独立行政法人科学技術振興機構が主催し、受入実施会場が共催し、財団法人日本科学技術振興財団がサイエンスキャンプ事務局となつて、日本国内の高等学校、中等教育学校後期課程又は高等専門学校(1～3学年)等に在籍する生徒を対象に、「スプリング・サイエンスキャンプ2010」を開催いたします。

本キャンプは、次代を担う青少年が、先進的な研究施設や実験装置のある研究現場等にて第一線で活躍する研究者・技術者等に直接ふれ、科学技術に夢を傾け、科学技術に対する志向を高める機会を提供するものです。

開催日：2010年3月20日～2010年3月29日の期間中の2泊3日
参加費：無料(自宅から会場までの往復交通費は参加者負担)

応募締切：2010年2月9日(火)〈必着〉
主催：独立行政法人科学技術振興機構
事務局：財団法人日本科学技術振興財団
問合せ先TEL：03-3212-2454
WEBサイト：<http://spp.jst.go.jp>

公益信託山村富美記念女性自 然科学者研究助成基金 助成公募(平成22年度)

下記の助成を行うことになりました。希望者は申請書を受託者にお送り下さい。

・対象：わが国の大学、国公立又は非営利事業財団等の研究機関において、自然科学(化学及びそれに関連ある物理学・生物学)の基礎研究に従事する女性研究者(国籍を問わない)。

・助成の種類：山村フェロー：博士号を取得している女性研究員(2百万円)2名程度。2年間助成。

・申込締切日：2010年3月31日(水)

・申請書：中央三井信託銀行のホームページからダウンロードしてください。

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html

申込・問合せ先：

〒105-8574 東京都港区芝3-33-1

中央三井信託銀行本店法人営業部

公益信託課山村基金担当

TEL:03-5232-8911 FAX:03-5232-8919

MAIL:Masami_Saito@chuomitsui.jp

公益信託林女性自然科学者研 究助成基金 助成公募(平成22年度)

下記の助成を行うことになりました。希望者は申請書を受託者にお送り下さい。

・対象：わが国の大学、国公立又は非営利事業財団等の研究機関において、自然科学(化学及びそれに関連ある物理学・生物学)の基礎研究に従事する女性研究者(国籍を問わない)。

・助成内容：①研究助成：15件程度、総額約2千万

円。②林フェロー:博士号を目指す研究者(1百万円)5名程度。2年間助成。③国際研究交流助成(国際研究集会での研究発表、海外での共同研究のための渡航)年12件程度、総額200万円。

・申込締切日:2010年3月31日(水)③は受託者に問い合わせのこと。

申請書:中央三井信託銀行のホームページからダウンロードしてください。

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html

申込・問合せ先:

〒105-8574 東京都港区芝3-33-1

中央三井信託銀行本店法人営業部

公益信託課林基金担当

TEL:03-5232-8911FAX:03-5232-8919

MAIL:Masami_Saito@chuomitsui.jp

地球電磁気・地球惑星圏学会

平成20年度 本会計決算書

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

(単位:円)

収入の部				
科 目	20年予算案	21.3.31	差異 (決算-予算)	備 考
会費収入	7,801,220	8,341,575	540,355	
正会員会費	6,862,800	7,405,575	542,775	12,000円×520名 + 昨年度以前分
学生会員会費	193,800	222,000	28,200	6,000円×29名 + 昨年度以前分
海外会員会費	164,820	138,000	-26,820	6,000円×19名 + 昨年度以前分
シニア会員会費	79,800	126,000	46,200	3,000円×39名 + 昨年度以前分
賛助会員会費	500,000	450,000	-50,000	50,000円×8口(8社) + 昨年度以前分
大会参加費	1,100,000	1,234,500	134,500	第124回総会・講演会
JICST英文許諾使用料	70,000	73,080	3,080	平成20年度E・P・S英文許諾使用料
利子収入	5,000	38,617	33,617	
雑収入	50,000	60,161	10,161	保育室利用料・予稿集売上
小 計	9,026,220	9,747,933	721,713	
前期繰越金	4,001,238	4,001,238	0	平成19年度決算額
合 計	13,027,458	13,749,171	721,713	
支出の部				
科 目	20年予算案	21.3.31	差異 (決算-予算)	備 考
管理費	2,820,000	2,943,643	123,643	
業務委託費	2,200,000	2,205,892	5,892	事務委託費1,805,296円(内MMBシステム利用料1,015,500円) 選挙関連281,946円、ホームページ管理費118,650円
会費振込手数料	100,000	156,568	56,568	
通信費	170,000	97,967	-72,033	会費請求書発送郵税・事務通信費 等
印刷費	100,000	198,548	98,548	印刷費・コピー代 等
旅 費	200,000	237,050	37,050	運営委員会 等 旅費
雑 費	50,000	47,618	-2,382	振込手数料・WEB手数料等・外国為替手数料
事業費	6,294,000	5,970,878	-323,122	
会誌分担金	2,000,000	2,000,000	0	平成20年度出版助成金は別会計に記載
許諾使用料運用支出	70,000	73,080	3,080	E・P・S運営委員会へ
会報印刷費	350,000	398,097	48,097	年4回発行・連絡会ニュース
会報発送費	400,000	508,335	108,335	年4回発送(総会プログラム同封)・JGL4回発送(実費・材料費含)
大会開催費	800,000	765,164	-34,836	第124回総会・講演会
秋学会投稿システム	1,254,000	1,281,000	27,000	投稿システム997,500円、プログラム印刷代283,500円
広報教育活動費	300,000	217,057	-82,943	
名簿作成費	300,000	297,500	-2,500	
学生発表賞経費	20,000	32,205	12,205	
男女共同参画経費	200,000	10,000	-190,000	会費10,000円
託児所設営費	100,000	147,440	47,440	
分科会活動, その他	300,000	241,000	-59,000	連合大会費用
60周年記念事業費	200,000	0	-200,000	
基金交流事業費	300,000	200,000	-100,000	国際交流事業費等
特別会計繰出金	300,000	300,000	0	長谷川・永田賞基金への繰出
予備費	50,000	0	-50,000	
小 計	9,764,000	9,414,521	-349,479	
次期繰越金	3,263,458	4,334,650	1,071,192	
合 計	13,027,458	13,749,171	721,713	

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<田中館賞>

◆収支計算書

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	665	残高証明書手数料	210
小計	665	小計	210
前期繰越金	495,945	当期収支差額	455
		次期繰越金	496,400
合計	496,610	合計	496,610

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<長谷川・永田賞>

◆収支計算書

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	868	残高証明書手数料	210
		賞状全書一式	16,800
		メダル制作	207,520
		銀杯製作	55,420
		振込手数料	735
小計	868	小計	280,685
前期繰越金	651,377	当期収支差額	-279,817
		次期繰越金	371,560
合計	652,245	合計	652,245

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<大林奨励賞>

◆収支計算書

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	202	賞状筆耕	25,830
		メダル刻印	8,400
		残高証明書発行手数料	210
		振込手数料	1,260
小計	202	小計	35,700
前期繰越金	149,129	当期収支差額	-35,498
		次期繰越金	113,631
合計	149,331	合計	149,331

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<大林奨励賞>

◆収支計算書

(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	202	賞状筆耕	25,830
		メダル刻印	8,400
		残高証明書発行手数料	210
		振込手数料	1,260
小計	202	小計	35,700
前期繰越金	149,129	当期収支差額	-35,498
		次期繰越金	113,631
合計	149,331	合計	149,331

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<西田国際交流基金>

◆収支計算書

(平成20年4月1日～平成20年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
利子収入	5,215	20年度派遣支出(2名)	400,000
		振込手数料	1,470
		残高証明手数料	210
小計	5,215	小計	401,680
前期繰越金	4,230,188	当期収支差額	-396,465
		次期繰越金	3,833,723
合計	4,235,403	合計	4,235,403

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<学会基金>

◆収支計算書		平成21年3月31日 (単位:円)	
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
小計	0	小計	0
前期繰越金	12,816,404	当期収支差額	0
		次期繰越金	12,816,404
合計	12,816,404	合計	12,816,404

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成20年度 特別会計<EPS関連>

◆収支計算書		(平成20年4月1日～平成21年3月31日) (単位:円)	
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
出版助成金	11,605,880	出版助成金支出	11,605,880
JICST英文許諾使用料	73,080	許諾使用料運用支出	73,080
小計	11,678,960		11,678,960
前期繰越金	0	当期収支差額	0
		次期繰越金	0
合計	11,678,960	合計	11,678,960

地球電磁気・地球惑星圏学会

平成22年度 本会計予算書

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

(単位:円)

収入の部				
科 目	22年予算案	21年予算	20年決算額	備 考
会費収入	7,579,050	7,665,060	8,341,575	会員数は平成21年9月現在
正会員会費	6,669,000	6,794,400	7,405,575	12,000円×585名×95%
学生会員会費	131,100	159,600	222,000	6,000円×23名×95%
海外会員会費	206,400	152,760	138,000	6,000円×43名×80%
シニア会員会費	122,550	108,300	126,000	3,000円×43名×95%
賛助会員会費	450,000	450,000	450,000	50,000円×9件×100%
大会参加費	1,200,000	1,100,000	1,234,500	第128回総会・講演会
JICST英文許諾使用料	0	0	73,080	EPS英文許諾使用料(H21からEPS特別会計に移行)
利子収入	30,000	10,000	38,617	
雑収入	60,000	50,000	60,161	
小 計	8,869,050	8,825,060	9,747,933	
前期繰越金	3,178,518	3,263,458	4,001,238	H22予算案にはH21の、H21予算にはH20の繰越予算額を参入
合 計	12,047,568	12,088,518	13,749,171	
支出の部				
科 目	22年予算案	21年予算	20年決算額	備 考
管理費	2,770,000	2,570,000	2,943,643	
業務委託費	2,200,000	2,000,000	2,205,892	事務委託費180万円(MMB利用料100万円) 選挙関連28万円、HP管理費12万円
会費振込手数料	120,000	120,000	156,568	
通信費	100,000	100,000	97,967	会費請求書発送代、事務通信費等
印刷費	100,000	50,000	198,548	印刷費、コピー代等
旅 費	200,000	200,000	237,050	運営委員会等旅費
雑 費	50,000	100,000	47,618	振込手数料・WEB手数料等・外国為替手数料等
事業費	5,810,000	5,790,000	5,970,878	
会誌分担金	2,000,000	2,000,000	2,000,000	EPS購読費(EPS運営委員会へ支出)
許諾使用料運用支出	0	0	73,080	(英文許諾使用料はH21からEPS特別会計に移行)
会報印刷費	350,000	350,000	398,097	年4号発行予定、連絡会ニュース含む
会報発送費	500,000	600,000	508,335	年4回発送(総会プログラム同封)予定、JGL 4回発送(送料、業務費)
大会開催費	750,000	800,000	765,164	第128回総会・講演会
秋学会投稿システム	1,300,000	1,300,000	1,281,000	H20実績＝投稿システム997,500円＋プログラム印刷代283,500円
広報教育活動費	200,000	300,000	217,057	アウトリーチHP内容更新、諸活動費
名簿作成費	300,000	0	297,500	H22は名簿作成を行う
学生発表賞経費	30,000	20,000	32,205	賞状筆耕料、副賞代
男女共同参画経費	30,000	20,000	10,000	分担金、諸活動費
託児所設営費	150,000	100,000	147,440	秋期学会での託児所
分科会活動	200,000	300,000	241,000	分科会活動のサポート、総会会場の借料等
基金交流事業費	300,000	300,000	200,000	国際交流事業費等
特別会計繰出金	0	200,000	300,000	特別会計<大林奨励賞>へ支出
予備費	50,000	50,000	0	
小 計	8,930,000	8,910,000	9,414,521	
次期繰越金	3,117,568	3,178,518	4,334,650	
合 計	12,047,568	12,088,518	13,749,171	

学会賞・国際交流事業関係 年間スケジュール

積極的な応募・推薦をお願いします。詳細は学会ホームページを参照願います。

賞・事業名	応募・推薦／問い合わせ先	締め切り
長谷川・永田賞	会長	2月28日
田中館賞	会長	8月31日
学会特別表彰	会長	2月28日
大林奨励賞	大林奨励賞候補者推薦委員長	1月31日
学生発表賞	推薦なし／問合せは運営委員会	
国際学術交流若手派遣	運営委員会総務	平成21年度は5月1日、7月20日 9月12日、2月5日
国際学術交流外国人招聘	運営委員会総務	若手派遣と同じ

SGEPSS Calendar

10-5-2～7 European Geosciences Union, General Assembly, ウィーン, オーストリア
 10-5-23～28 日本地球惑星科学連合大会, 幕張メッセ国際会議場
 10-7-5～9 7th Asia Oceania Geosciences Society annual meeting, ハイデラバッド, インド
 10-7-18～25 38th COSPAR Scientific Assembly, ブレーメン, ドイツ

地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS)

会長 津田 敏隆 〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 京都大学生存圏研究所
 TEL: 0774-38-3804 Fax: 0774-31-8463 E-mail: tsuda@rish.kyoto-u.ac.jp
 総務 山本 衛 〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 京都大学生存圏研究所
 TEL: 0774-38-3814 Fax: 0774-31-8463 E-mail: yamamoto@rish.kyoto-u.ac.jp
 広報 吉川 一朗 (会報担当) 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学
 大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
 TEL: 03-5841-4577 FAX: 03-5841-4577 E-mail: yoshikawa@eps.s.u-tokyo.ac.jp
 河野 英昭 (会報担当) 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学
 大学院理学研究院地球惑星科学部門
 TEL: 092-642-2671 FAX: 092-642-2684 E-mail: hkawano@geo.kyushu-u.ac.jp
 村田 功 (会報担当) 〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉6-3 東北大学
 大学院理学研究科地球物理学専攻
 TEL: 022-795-5776 FAX: 022-795-5775 E-mail: murata@pat.gp.tohoku.ac.jp
 運営委員会 (事務局) 〒650-0033 神戸市中央区江戸町85-1ベイ・ウイング神戸ビル10階
 (株) プロアクティブ内 地球電磁気・地球惑星圏学会 事務局
 TEL: 078-332-3703 FAX: 078-332-2506 E-mail: sgepss@pac.ne.jp

賛助会員リスト

下記の企業は、本学会の賛助会員として、
地球電磁気学および地球惑星圏科学の発展に貢献されています。

エコー計測器 (株)

〒182-0025
東京都調布市多摩川1-28-7
tel. 042-481-1311
fax. 042-481-1314
URL <http://www.clock.co.jp/>

クローバテック (株)

〒180-0006
東京都武蔵野市中町3-1-5
tel. 0422-37-2477
fax. 0422-37-2478
URL <http://www.clovertech.co.jp/>

(有) テラ学術図書出版

〒158-0083
東京都世田谷区奥沢 5-27-19
三青自由ヶ丘ハイム2003
tel. 03-3718-7500
fax. 03-3718-4406
URL <http://www.terrapub.co.jp/>

(有) テラテクニカ

〒206-0812
東京都稲城市矢野口 2番地
tel. 042-379-2131
fax. 042-370-7100
URL <http://www.tierra.co.jp/>

日鉄鉱コンサルタント(株)

〒108-0014
東京都港区芝4丁目2-3NOF芝ビル5F
tel. 03-6414-2766
fax. 03-6414-2772
URL <http://www.nmconsults.co.jp/>

日本電気(株) 宇宙システム事業部

〒183-8501
東京都府中市日新町 1-10
tel. 042-333-3933
fax. 042-333-3949
URL <http://www.nec.co.jp/solution/space/>

富士通 (株)

〒261-8588
千葉県美浜区中瀬 1-9-3
富士通 (株) 幕張システムラボラトリ
tel. 043-299-3246
fax. 043-299-3211
URL <http://jp.fujitsu.com/>

丸文 (株) システム営業本部 営業第一部 計測機器課

〒103-8577
東京都中央区日本橋大伝馬町 8-1
tel. 03-3639-9881
fax. 03-5644-7627
URL <http://www.marubun.co.jp/>

明星電気(株) 装置開発部

〒372-8585
群馬県伊勢崎市長沼町2223
tel. 0270-32-1113
fax. 0270-32-0988
URL <http://www.meisei.co.jp/>